

郷土教育推進研究報告書

平成23年度 「郷土日野」指導事例 第 7 集

日野市立教育センター
郷土教育推進研究委員会

目 次

第7集の発行にあたって

日野市立教育センター 所長 加島俊雄

I 研究の概要

1. 研究主題	1
2. 研究主題設定の理由	1
3. 研究の目的	1
4. 重点課題	2
5. 研究構想図	3
6. 研究の進め方	4
(1)研究の組織	
(2)研究の経過	

II 研究の内容

1. 郷土教材を活用した学習指導実践事例	
(1)東光寺にまつわる神話・伝承～神明様のお告げ～（第1学年 国語）	5
(2)日野のにんじんづくり～農家の仕事～（第2学年 生活）	10
(3)日野の町探検～ふしぎたんけんふれあいたんけん～（第2学年 生活）	17
(4)日野の昔話～むかしのくらし～（第3学年 社会）	23
(5)日野市の地名の由来と地形の特徴（第3学年 社会）	29
(6)旭が丘の雑木林～炭焼きをして炭のよさを知ろう～（第4学年 総合）	35
(7)お米プロジェクト～お米を育て、人と関わり、食に生かす～（第5学年 総合）	41
2. 新たに収集・開発した郷土資料・教材	
(1)軍配団扇と徳川家康（平山八幡神社）	47
(2)時刻表を活用して授業化する	51
(3)教材化できる日野の昔話 再話例	55
3. 関係機関との連携・協力の広がり・深まり	
(1)郷土教育推進に向けた体制づくり	57
(2)日野市立図書館のあゆみ 50年と図書館・郷土教育との連携	60
4. 郷土教育推進のための普及・啓発	
(1)郷土教育を実践する指導者の育成	63
①フィールドワーク	63
②研修会	68
・フィールドワークのまとめ	69
・潤徳国民学校の思い出	70
・教材化の視点と課題設定	72
(2)校長講話	
① 校長講話の役割～郷土を題材とした講話～	73
② 八坂神社の秋祭り	74
③ 日野にも爆弾が落ちた	75
④ 高幡の歴史～若宮神社のいわれ～	76
⑤ 平山おかぼと林丈太郎	77
⑥ 開校記念日	78
⑦ 旭が丘の地名に新しい希望を込めて	79
⑧ ふるさとから学ぶ	80
⑨ 郷土を愛する心～日野に生きる私たち～	81

III 研究のまとめ ～成果と課題～

◎ 協力者・協力団体名簿 郷土教育推進研究委員会委員名簿	84
------------------------------	----

第7集の発行にあたって

日野市立教育センター
所長 加 島 俊 雄

「郷土日野」指導事例第7集が発行の運びとなりました。教育センターの郷土教育推進研究委員会（日野第一小学校校長中島和夫委員長）において、平成23年度の研究成果を取りまとめ編集したものです。

日野の歴史、自然、文化、産業、人物などの教材化を通して「ひのっ子」の郷土意識を育もうとするこの研究は、年々深まりと広がりを見せ、その成果は、学校の授業で活用され、また改定中の中学校社会科副読本にも取り入れられると聞いています。

第7集は、郷土教材を活用した学習指導実践事例や郷土に関する校長講話を登載するほか、新たに収集した郷土資料、関係機関との連携、フィールドワーク・研修会の様子など、現場を踏んだ実践的な参考情報が満載で、郷土教育の推進にいっそうの厚みが加わったと思っています。

日野から多摩テックが撤退し、その跡地に明治大学のスポーツ施設が進出すると伝えられたのは、まだ耳新しいことですが、平成23年度になると日野自動車工業の工場部門の茨城県移転が報じられ、他方で多摩平にイオンモールの出店計画が発表されました。いずれも日野の地域社会に大きな影響を与えずにはおかない問題です。戦後、日野市は宅地化が急激に進み、地域社会も変貌してきましたが、市制50周年（平成25年）を迎える今、改めて日野市の将来、方向性を考え、見定めていくことが必要となっています。

このような地域社会の動向に対して、日野の郷土教育においてもそれらの変化をどう取り込み教材化していくか、大きな課題になってくると思います。推進研究委員会の継続的な研究活動に対してもご助言、ご意見、ご要望など、お寄せいただければと考えています。

推進研究委員会は、学校、図書館、郷土資料館、新選組のふるさと歴史館、地域の方々の参加と協力を得て、いわば地域の力を結集して取り組んでいるところにひとつの特色があります。この第7集を取りまとめるにあたってご尽力、ご協力いただいた皆様方に御礼申しあげるとともに、これまでにまして第7集が参考にされ活用されることを願っています。

I 研究の概要

1 研究主題

郷土意識を育む指導の在り方
～郷土の歴史、自然、文化、産業、人の教材化を通して～

2 研究主題設定の理由

本研究は、日野市の小・中学校、博物館、図書館、教育委員会、教育センターが連携して推進する7年目の継続研究である。教育基本法、学校教育法、学習指導要領が改正され、教育の目標に「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできたわが国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」の文言が加えられた。本市の「教育基本構想」には、この考え方のもと、第2項に「日野市の自然・歴史・文化・産業等、郷土をより親しく学ぶために、郷土資料を編集し、地域の方々や専門家の協力を得た授業の推進」、第7項に「授業の質の向上を図るために、地域の教育資源を活用した授業の実施」が明記されている。郷土教育が、日野市の教育の最重要課題の一つとなっている。即ち、学校教育では、「郷土に誇りと愛着をもったひのっ子」「将来の日野を背負って立つ日野人」の育成が日野市の教育課題であり、市民からも大いに期待されているところである。そこで、本委員会では、日野の豊かな自然や歴史的文化的環境を活用した郷土教育を推進し、児童・生徒に日野のよさや特色に気付かせ、郷土を大切にすることを育てることが大切であると考えた。そのため、郷土教育推進研究委員会では、郷土教材の発掘・教材化に努め、指導計画を作成し、授業を実践している。そして、この実践と成果を全市の小・中学校に普及・啓発するため、「郷土日野」指導事例集を作成し、市内全小・中学校、市立博物館・図書館等、関係機関へ配布している。

この趣旨を生かすため、今年度の研究主題を「郷土意識を育む指導の在り方～郷土の歴史、自然、文化、産業、人の教材化を通して～」と設定し、重点課題を3点に絞って推進研究と授業実践に当たることにした。

3 研究の目的

「ふるさと日野に誇りと愛着をもったひのっ子」「将来の日野を背負って立つ日野人」を育成するために、学校における郷土教育の在り方を研究する。この研究に基づき、各学校は郷土を活用した様々な教育活動を実践し、次のような児童・生徒を育成することが本研究の重要な目的である。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">○ 郷土の歴史、自然、文化、産業、人を理解し、先人への感謝の心をもった ひのっ子○ 郷土の特色やよさに気付き、継承・発展させたいと願い、行動する ひのっ子○ 郷土の一員としての自覚と誇りをもち、仲間や郷土の人々と協働できる ひのっ子○ 郷土の未来の姿を思い描き、よりよい郷土の実現について思考できる ひのっ子 |
|---|

4 重点課題

今年度の重点課題を郷土教育の普及・啓発とし、具体的な課題3点を設定した。

- ① 郷土教育を推進する指導者（教員）の育成
- ② 図書館・博物館等、関係機関と連携した授業づくり
- ③ 郷土教材や実践事例の電子データ化

（１） 郷土教育を推進する指導者の育成

- ① 夏期郷土教育研修会（市教委共催）を実施し、各小中学校の郷土教育推進リーダーを育成する
 - ・午前 高幡地区フィールドワーク
 - ・午後 潤徳小学校で実践事例の発表・講義・演習
- ② 郷土教育推進研究委員が各学校・地域で郷土教育のリーダーとなる
 - ・毎月の委員会で、実践報告・協議を重ね、研究を深める
 - ・学識経験者、博物館学芸員、図書館司書から情報・資料の提供と指導・助言を受け、郷土教育の教材開発や実践に生かす。各委員が授業力の向上に努める。

（２） 博物館・図書館との連携

博物館・図書館が学校と関わる機能・役割として次の3点が考えられる。

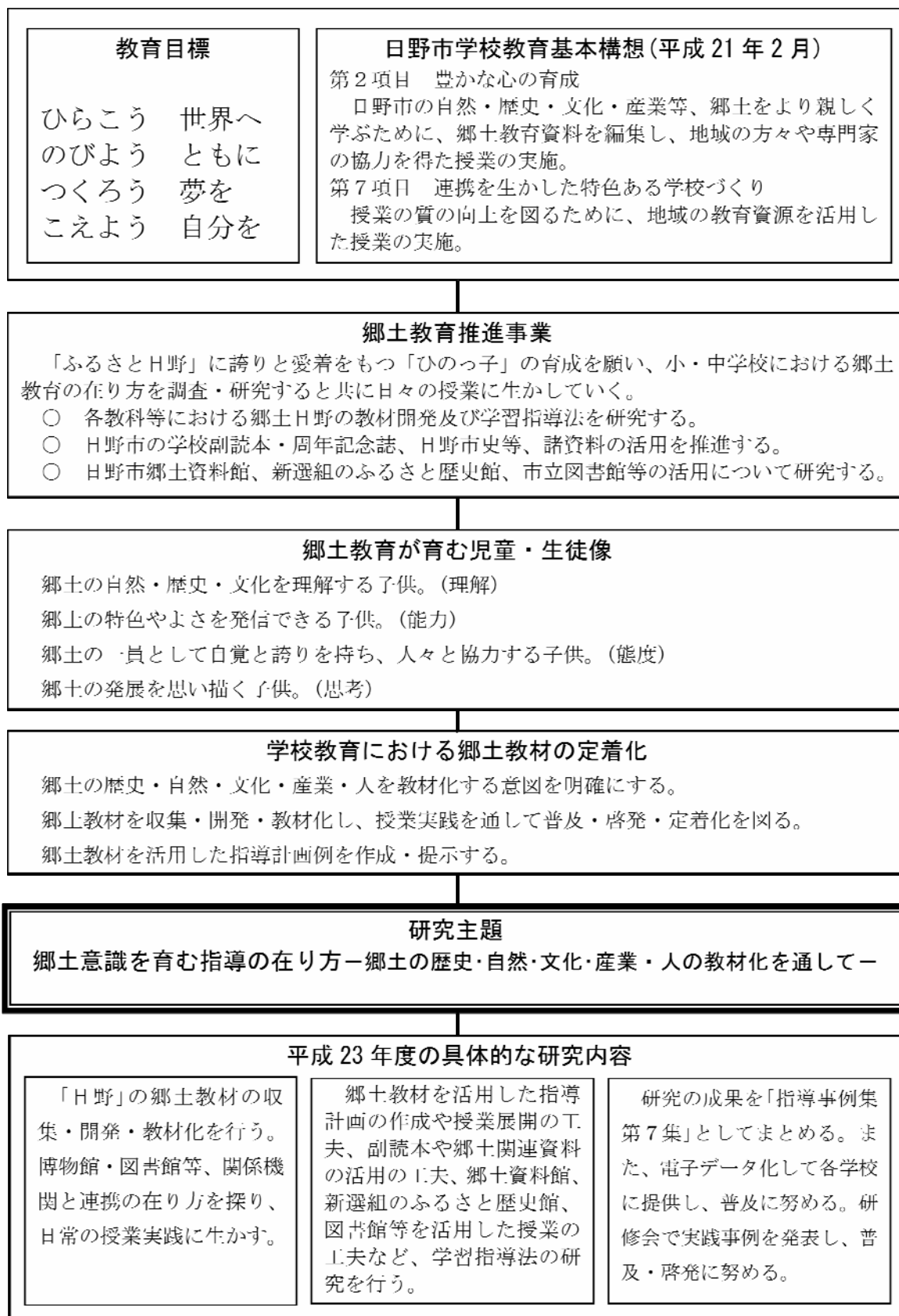
- ① 郷土に関する資料や情報が蓄積されている。
- ② 蓄積された資料や情報をもとに小・中学校の授業を支援する。協働授業が実施できる。
- ③ 本市の博物館・図書館は、学校・市民に開かれた機関で、専門的見地から指導・助言・協働ができる。児童・生徒が興味・関心を高め、意欲的に学ぶことが出来る。

博物館・図書館と連携・協力することにより、効率的でより専門性を発揮した、児童・生徒をひきつける授業が実施できる。今後ますます博物館・図書館等関係機関と、よりよい連携協力関係を築き協働することが大切となってくる。

（３） 郷土教材の電子データ化 教育センターホームページの充実・整備（PDF化）

- ① 郷土日野指導事例 第1集～第6集 全ページが閲覧できる（図版がカラーで見られる）
- ② 郷土日野画像図版資料集 第5集分が完成 写真や図表が、すぐ授業で使える
- ③ 年間3回発行の「教育センターだより」にも、今年度から本委員会で発掘・教材化した事例を掲載することにした。

5 研究構想図



6 研究の進め方

(1) 研究の組織

小学校教員、郷土資料館学芸員、中央図書館司書、新選組のふるさと歴史館学芸員、学識経験者を各委員とし、教育委員会指導主事、教育センター所員を事務局として、17名からなる委員会組織を構成した。月1回の郷土教育推進研究委員会では、開発教材・実践事例の提案、情報交換・連絡調整、郷土資料館特別展の見学等を行った。

(2) 研究の経過

期日・場所	委員会活動の名称	研究活動の内容
4月8日(金) 日野第一小学校	役員会①	・委員会の構成・組織・内容・年間計画・日程等の打ち合わせ
5月26日(木) 教育センター	郷土教育推進研究委員会①	・委員の委嘱・組織づくり・本年度の活動内容の検討・研究活動日程の検討
6月28日(火) 教育センター	郷土教育推進研究委員会②	・郷土教材収集・開発の視点検討(学年、地域) ・フィールドワークのねらい、地域の検討
7月26日(火) 高幡地区	フィールドワーク実地踏査	・市教委「教育課題研修～郷土教育～」と共催事業の事前調査、内容の検討
8月2日(火) 高幡地区 潤徳小学校	郷土教育推進研究委員会③ フィールドワーク実施と教材化の講義・演習	・フィールドワーク(高幡不動門前町、高幡山金剛寺、高幡城、藤治権現、向島用水親水路) ・室内研修(事例発表、講義、教材化の演習)
8月26日(金) 教育センター	郷土教育推進研究委員会④	・フィールドワークの反省、まとめ ・郷土教材を活用した学習指導事例の検討・協議 ・中間報告会の内容検討と発表者の決定
9月22日(木) 教育センター	郷土教育推進研究委員会⑤	・郷土教材を活用した学習指導事例の検討・協議 ・中間報告会の発表原稿検討 ・実践事例第7集のプロット案検討
10月27日(木) 教育センター	教育センター中間報告会 郷土教育推進研究委員会⑥	・事前リハーサル、中間報告 ・中間報告会の反省、研究発表会の内容検討
11月19日(土) 日野第一小学校	役員会②	・研究発表会までの日程、内容、方法の検討 ・実践事例第7集プロット案検討、作業日程確認
12月27日(火) 教育センター	郷土教育推進研究委員会⑦	・郷土教材を活用した学習指導事例の検討・協議 ・研究発表会と実践事例第7集の内容決定、
1月26日(木) 教育センター	郷土教育推進研究委員会⑧	・郷土教材を活用した学習指導事例の検討・協議 ・研究発表会の発表原稿検討
2月20日(月) 教育センター	教育センター研究発表会 郷土教育推進研究委員会⑨	・事前リハーサル、研究発表 ・研究発表会の反省、実践事例第7集作成手順
3月28日(水)		・「郷土日野」指導事例第7集 業者原稿入稿
4月23日(月)		・「郷土日野」指導事例第7集 業者納品
4～5月		・関係機関へ発送・電子データ化(HP公開)

(小杉博司)

Ⅱ 研究の内容

1. 郷土教材を活用した学習指導実践例

(1) 東光寺地区にまつわる神話・伝承～神明様のお告げ～

(第1学年 国語「うみの 水は なぜ しょっぱい」)

1. 教材化の意図

東光寺地区には「昔話」や「神話・伝承」といわれるものが数多くある。以前、本校では、郷土に愛着をもってもらおうという目的から、「昔話」や「神話・伝承」を踏まえたかるたを作成し、授業や年に一回のかるた大会を継続して行っている。しかし、ゲーム感覚のかるた、年に一回のかるた大会につぐ郷土を訴えるような教材、授業のなかで行えるような教材はできていなかった。

国語の学習指導要領の中に、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」がある。また、(1)「A 話すこと・聞くこと」、「B 書くこと」及び「C 読むこと」の指導を通して、次の事項について指導するとある。低学年でいえば、「ア 伝統的な言語文化に関する事項」として「(ア)昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること。」とねらいが定めてある。

そこで、東光寺地区にまつわる昔話や神話・伝承をとりあげる。また、今回は、神話・伝承に着目し、教材化していく。なぜなら、「昔話」は「むかしむかし、あるところに」などの言葉で語り始められる空想的な物語であり、特定または不特定の人物について描かれると定義され、一方、「神話・伝承」は一般的には特定の人物や場所、自然、出来事などと結び付けられて、伝説的に語られている物語と定義されている。取り上げる「神明様のお告げ」は、栗野須村と東光寺村、神明様、お茶屋の松、用水の取り入れ口など特定の場所、人物が登場し、領地争いという出来事が今の区分けに影響していることから「神話・伝承」と位置づけた。具体的な活動として、「イ 物語の読み聞かせを聞いたり、物語を演じたりすること。」と関連付けて、初歩的な語りや紙芝居などの発表活動を行う。それらの活動を通して、伝統的な言語文化に触れることの楽しさを実感し、「郷土に対する愛着の芽」を育てていきたい。

2. 指導計画

(1) 単元のねらい

- 関心** 昔話のおもしろさを味わい、進んで昔話を読もうとする。
- 読む** 人物の様子やしぐさ、場面の様子を想像して音読することができる。登場人物の行動や人柄に対する自分の考えを持つことができる。
- 伝統文化** 紙芝居「神明様のお告げ」の発表を通して、昔話や神話・伝承らしい表現に気づき、親しみをもつことができる。

(2) 単元の評価内容

興味・関心	・友達と楽しく発表し合い、「神明様のお告げ」について感想をもつことができる。
読む	・ゲストティーチャー(語り部)の話し方や間のとりかたなどを想起しながら、工夫した読み方ができる。
話す・聞く	・伝えることを注意深く聞いたり、伝えたいことを正しく伝えることができる。
伝統的な文化言語	・昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすることができる。

3. 単元について

1年生は、2学期に国語の「昔話をきこう」で語り部さんに来ていただき、日本各地の昔ばなしを地方の方言や独特の語り口調・言い回しなどに触れることができた。その後、子どもたちは語り部さんの使った「どんとはれ」という言葉を口々にし、感想を出し合った。3学期は、それらの感想や言い回し、語り口調を想起させて東光寺地区の神話・伝承の「神明様のお告げ」を発表し合ったりさせる。また、紙芝居形式の発表とすることで、話したり聞いたりするだけでなく、見ることを通して話のイメージを明確にする。紙芝居に関しては、保護者の有志の方々に作っていただき、親子の共同作品にした。授業での発表風景を保護者会や学校公開で上映し、感想や質問を出し合い意見交流の場にしたいと考える。そうすることで、子ども同士の認め合いだけでなく、親から褒められたという実感が授業の達成感にもつながると考え、実践していく。

4. 教材化の視点と手立て

①より効果的な発表形態の工夫

- ・語り部さんの語り口調や言い回しを想起し、発表グループがそれぞれアレンジをして紙芝居を行う。
- ・感想や質問(例：どうしてそのような語り口調をしたのか)など子どもの目線で考えられることを発表する時間を設定する。
- ・集会での全学年に向けての発表やビデオ撮影など場の設定をする。

②気づきを大切に、協同的な学習指導の工夫

- ・「〇〇はこうしたほうがいい」「このことばつかってみたら」など1年生でできる話し合いの中で、作り上げていけるようにする。

5. 指導計画(全10時間)

	時間	主な学習活動 ・学習内容	●指導上の留意点・支援 ○評価【内容】(方法)
導入	1	今までに聞いたり読んだりした昔話を思い出し、昔話に関心をもつ。 ・教師や語り部さんによる昔話の読み語りを聞く。 ・知っている昔話を発表したり、昔話とはどんなものか知っていることを話し合う。	●昔話については家族の人が知っている昔話を調べてくるように指示する。 ○昔話の読み語りを楽しみ、昔話を読んだり聞いたり体験を想起しようとしている。【関心】(発表・様子)
つかむ	2	教師の範読を聞く「うみの水はなぜしょっぱい」の粗筋をとらえ、感想を交流する。 「読み語り発表会」をしようという目標をもつ。 ・様子がよく伝わるようにという音読のめあてをもつ。	○大まかに話をとらえ、感想を交流することができる。【話聞】(発表・班交流) ○発表会に向けて、めあてをもつことができる。【話聞】(様子・ノート)
探究	3 4 5 6	場面ごとに繰り返し音読することで、人物の様子を想像したり、昔話らしい表現に気づく。 ・ぼうさまの様子 ・兄と弟の行動と叙述の対比 ・ひきうすを回す呼びかけの言葉 ・昔話らしい語り口・言い回し ・繰り返しの表現 など工夫したいことを話し合い、場面の様子を読み取る。 登場人物に語りかけたいことなどを考えて書く。	●何度も声に出して読むことで語り口調や言い回しなどのおもしろさに気づかせる。 ●場面の挿絵をもとに、イメージをもたせ、はっきりと元気よく音読させる。 ○音読することを通して、場面の様子を想像したり、昔話らしい表現に気づくことができる。【読む】(音読) ○登場人物の行動や人柄に対する自分の考えを書くことができる。【書く】(ノート)
表現	7 ・ 8	好きな場面を選んで、「読み語り発表会」をする。 ・簡単な人物紹介をしてから読み語りをする。 ・ペープサートなどを使って、人物の動きを表しながら読み取る。	●ペープサートのほかにも、寸劇や紙芝居の方法も紹介し、表現方法も選択させる。 ○場面の様子や昔話らしい表現に気をつけて音読することができる。【言語】(音読発表)
発展(本時)	9 ・ 10	学区域にまつわる昔話や神話・伝承について知る。 ・神話・伝承「神明様のおつげ」を聞き、感想をもつ ・学習を生かして、昔話らしい語り口・言い回しを取り入れて発表する。	●隣のクラスに発表することを目標にし、それぞれ場面ごとに分かれて読み方などを工夫させる。 ●ビデオで撮影し、発表を振り返らせる。 ○紙芝居「神明様のお告げ」の発表を通して、昔話や神話・伝承らしい表現に気づき、親しみをもつことができる。【伝統文化】(発表)

6. 本時の学習

(1) 本時のめあて

○学習を生かして、神話・伝承「神明様のおつげ」を発表する。

(2) 本時の展開(9・10/10)

	学習活動	●主な支援 ○評価
つかむ	<u>1. 学区域にまつわる昔話や神話・伝承について知る。</u> ・学区、とくに東光寺地区にはたくさんの昔話があるに気づかせ、そのなかでも、「神明様のおつげ」を取り上げ、範読し、感想を発表する。 <u>2. 学習のめあてを知る。</u>	●みんなが知っている昔話から、身近で知らない昔話まで紹介し、関心をもたせる。
語り部さんになりきって、「神明様のおつげ」を紙芝居形式で1組に語ろう！		
ふかめる	<u>3. 場面に分かれて大まかな粗筋を知り、アレンジする。</u> ・1～8の場面にわかれ、それぞれの場面のなかで基となる文を語り部さんの話し口調や言い回しを思い出しながらアレンジする。 <u>4. 場面ごとでアレンジした口調や言い回しを練習する。</u> ・それぞれがアレンジした原稿を発表し、ほかのグループの感想を聞き、修正・完成する。 ・全体通したのをビデオで撮影し、振り返る。 <u>5. 1組に発表する。</u> ・1組のみんなの前で発表し、感想を聞く。 ・ビデオで振り返り、自己評価する。	●発表してみたい場面を選び、語り部さんの話を想起させ、できそうなものを取り入れさせる。 ●練習する時間を多めにとることで、話の内容や状況にあった語り口や言い回しを十分に吟味させる。 ●それぞれの様子をビデオで撮影し、自己での振り返りや友達からのアドバイスをもとに修正・完成させる。 ●語り部組「1-2」とチーム名を名づけ、意欲を高め、発表させる。 ●コメントを受け、振り返りにつなげる。
まとめる	<u>6. 振り返りを書く。</u> ・発表してみて感じたことや思ったこと、楽しかったことなどを書いて発表する。	●昔話や神話・伝承に興味をもち学習に取り組めたかを、友達からのコメントや振り返りからとらえる。 ○紙芝居「神明様のお告げ」の発表を通して、昔話や神話・伝承らしい表現に気づき、親しみをもつことができる。 【伝統文化】(発表・ノート)

(3) 評価

○昔話や神話・伝承に興味をもち学習に取り組めた。

○昔話や神話・伝承らしい表現に気づき、親しみをもつことができた。

7. 資料「神明様のお告げ」（紙芝居）

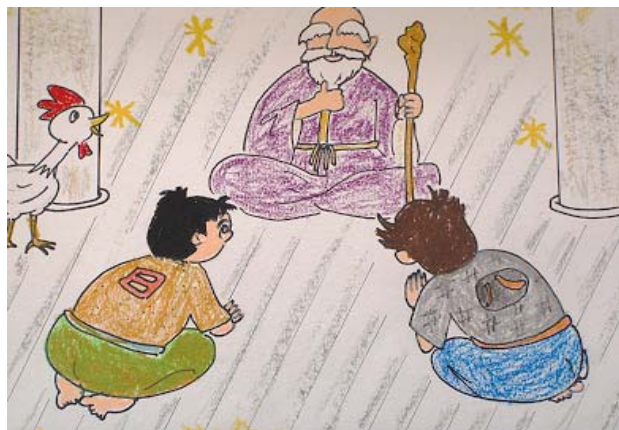
①「タイトル」



②「東光寺村と栗ノ須村の言い争い」



③「神明さまのお告げ」



④「栗ノ須村の馬」



⑤「東光寺の馬」



⑥「東光寺の馬がへたばった」



⑦「栗ノ須村が喜ぶ」



⑧「お茶屋の松も用水の取り入れ口も・・・」



(永江悟大)

(2) 日野のにんじんづくり

～にんじんづくりから農家の仕事を理解する～

(第2学年 生活)

1. 教材化の意図

本校では、これまで食育の一環としてミニトマトやピーマン、ナスを植え、野菜の栽培活動を中心に進めてきた。また、本校学区はかつて豊かな稲作地域であり、現在でもにんじんをはじめ、サトイモやネギ、ナス等の畑が多く見かけられる。児童にとって、身近である畑を通し、農家の人の苦労や工夫を理解させることは郷土を考える上で重要であると考え、本単元を設定した。

しかし、児童はこれまで栽培活動と地域とをあまり結びつけてはこなかった。そこで本単元では、農家で働く人々の苦労や工夫に気がつけたいと考えた。また、給食に出てくる野菜は、日野で作られているものが多く、身近なところで野菜が作られていることを知ったり、その野菜は「だれが」「どのように」「どんな思いや願いで」作っているのかといった、栽培に込められた農家の思いを理解させたいと考えた。また、野菜は今回にんじんを選んだ。これは毎日給食に使われていたり、地元野菜としての供給量が一番多かったりすること等が理由である。

本市において給食の地場野菜の自給率が高いのは野菜づくりがさかんであることに起因しており、身近なところで栽培活動が進められていることを理解させたい。

2. 指導計画

(1) 単元目標

- ・日野市の野菜について関心をもち、地域で働く人の思いや願いを知る。
- ・にんじんが育っていく様子を知り、郷土の野菜づくりへの親しみをもち、郷土の野菜を大切にすることができる。

(2) 単元の指導計画（全9時間）

	ねらい	学習活動	参考資料
1	にんじんづくりについて、興味をもつ。 (なぜにんじんづくりを行うのかを知る。)	・給食で一番使われている野菜を予想する。 ・本校の献立表を見て、一番多く使われている野菜がにんじんであることを知る。 ・にんじんは日野市で多くつくられていることを知る。	・9月の献立表
2	栽培に必要な畑づくりを知る。	・にんじんのたねを見る。 ・栽培に適した畑のつくり方を知る。 ・どのようなにんじんを育てたいのか考える。	・にんじんのたね ・草取りを後の写真 ・耕された土の写真
3	畑づくりの努力と工夫を知り、種まきをする。	・地域の農家の人からたねの植え方を聞き、一人ひとり種まきをする。 ・地域の人からにんじんの育て方を聞く。	・ゲストティーチャー（農家の人）
4	日野市のにんじんづくりの現状を知る。	・日野産の野菜を予想し、日野市で作られているにんじんがどのくらいあるのか知る。	・学校周辺の地図 ・日野市の農作物の

		・給食で作られているにんじんについて知る。 ・農家の畑を見たり、苦労を知ったりする。	グラフ ・農家の畑の写真
5	にんじんが育っていく中での疑問を考える。	・にんじんを育てていく中で、疑問に思ったことや農家の人に聞いてみたいことを一人ひとり考える。 ・同じ疑問ごとに意見をまとめ、クラスでの質問事項を決める。	・草取り後の写真 ・耕された土の写真 ・肥料、マルチ ・天候で育たなくなった作物の写真
6	にんじん栽培の努力と工夫を理解する。	・自分たちの疑問や質問に答えてもらう。 ・農家の方の栽培に込められた思いや苦労の話を実際に聞く。	・ゲストティーチャー（農家の人）
7 8	自分たちが育ててきたにんじんを大切にします。	・自分たちで育ててきたにんじんを収穫する。 ・収穫したにんじんの型を抜き、「ラッキーにんじん」として給食にいらてもらう。	・一人ひとりの型の写真
9	栽培活動を振り返り、郷土への親しみをもつ。	・本単元を通じて、わかったことや感じたこと等をまとめる。 ・栽培活動をもとにして、農家の人へお礼の手紙を書く。	・これまでの活動の写真

※水やりや草むしりは、当番を決めて行っていく。

随時にんじんの観察をしていく。

3. 本時の展開（5／9）

（1）本時のねらい

これまで子どもたちが行ってきた栽培体験をもとに、にんじんの栽培活動について考える。

（2）本時の展開

	学習活動	・教師のかかわり ○評価
つかむ	1、本時の流れを知る。 にんじんを育てる中での疑問や、農家の人に話を聞いてみたいことを考えよう。 2、自分たちはどんなにんじんをつくりたいのか振り返る。	・子どもたちが意見を出しやすいようにあらかじめ数枚の写真等の資料を用意しておく。（草取りをした後の写真・耕された土の写真・肥料、マルチ・天候で育たなくなった作物の写真）
調べる	3、にんじんを育てていく中で、疑問に思ったことや農家の人に聞いてみたいことを一人ひとり考える。 4、自分が考えた意見を発表する。 5、同じ疑問ごとに意見をまとめ、クラスでの質問事項	・自分がどんなにんじんをつくりたいのかをもとにしながら、意見を考えさせる。 ・短冊を用意しておき、それを黒板に貼っていく。 ・貼ってある短冊を並び替えな

	を決める。	がら、同じような意見をまとめていく。 ○育てる中での疑問や、農家の人に話を聞いてみたいことを考えているか。(発言・ワークシート)
ま と め る	6、本時の活動を振り返る。	・農家の人の栽培に対する「思いや願い」に触れながら、まとめる。 ・次時では、農家の人に答えてもらおうということを伝える。

<児童からの主な質問と地域の農家の答え>

- ・水はどのくらいあげればいいんですか。
→雨が降っている時はあまりあげなくてもよい。
- ・大変なことは、何ですか。
- ・にんじんづくりにおいて大切なことは何ですか。
→草むしりをするのが一番大変でもあり、大切である。
- ・にんじんがおいしく食べられる時期はいつですか。
→寒い冬に一番適している。
- ・今回使った肥料を教えてください。
→苦土石灰や鶏糞を使った。
- ・マルチはなぜやるんですか。
→雑草に日光を当たらずに、雑草を生えにくくするため。
- ・葉っぱが虫に食われたり、枯れてしまったらどうするんですか。
→軽く葉っぱを振って、追い払う。毎朝虫がついていないのか確認をする。

<農家の方に質問した後の子どもたちの感想>

- ・にんじんのことをいろいろと知ることができた。
- ・今日教えてもらったことを守って、大きくておいしいにんじんを作りたい。
- ・野菜のことをたくさん知っていて、すごいです。野菜の博士だと思った。
- ・これから葉っぱに虫がついてないか確認することを忘れない。
- ・給食に出てくる野菜を残さず食べようと感じた。
- ・農家の方の苦労や工夫がわかった。

★成果

- ・給食の時に、子どもたちから「今日もにんじんが給食に使われているね。」という声が自然に上がるようになった。
- ・実際にゲストティーチャーの方に来ていただいたときには、書ききれないほどたくさんのメモを書いていた。
- ・農家にはお手伝いをお願いせず、自分たちだけで育てた他の野菜を収穫したときに、思いのほか小ぶりのものが多かった。そのとき、子どもたちから「土づくりが不十分で、土がフカフカではないから」という意見が出てきた。
- ・毎朝ににんじんの葉っぱに虫がついていないのか調べる児童が自然に現れた。
- ・市内の農家をはじめ、農協や市役所（産業振興課）など、地域との連携を図ることができた。

★課題

- ・にんじんには興味をもったものの、なかなか農家の苦労や工夫にまで気が付かなかった。
- ・せっかくいただいた資料を、効果的に子どもたちに紹介することができなかった。

4. にんじんづくり 活動の様子

①土づくり（耕す）



はじめはかなりの
草がありました。



草を取り、土を
耕しました。

②土づくり（肥料）



苦土石灰や鶏糞を
混ぜました。



仕上げには、農家の方に機械
で耕してもらいました。

③マルチ



「マルチ」と呼ばれるシートを土にかぶせると、乾燥が防止されたり、雑草が生えにくくしたりします。

また、マルチには穴があいているので、子どもたちには「一人一つの穴に種をまく」という種まきの際の説明が明瞭になりました。

④種まき



種をまく前に、にんじんの種は、コーティングされている方が蒔きやすいということを教えてもらい、観察をしました。

そして、指の第1関節まで掘り、種を入れやさしく土をかぶせるというポイントも教わりました。



抜き取ったにんじんは捨てたりはせずに、別の場所に植えかえました。

⑤間引き



これからより大きなにんじんを育てるために、間引きが必要だと知りました。



⑥収穫



なかなか抜けないくらい、
大きいよ！



⑦ラッキーにんじんづくり



水は冷たいけれど、よく
土を落とそう。



給食室で、輪切りにして
ください。



たくさんのにんじんが、
収穫できました！



型抜きは力があるけれど、楽しいな～



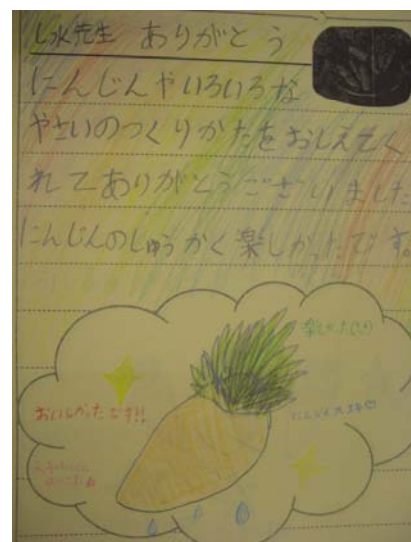
こんな形のにんじんも
ありました。



ラッキーにんじん完成だ！！



これだけ大きくて、おいしいに
んじんができたのは、地域の
農家の協力のおかげです。



5. 参考資料

・日野市産業振興課「日野市の学校給食における農産物供給事業」 平成22年8月

<学校給食地元野菜等供給品目> 単位 Kg

平成20年度 1位 長ねぎ 9422.5

2位 にんじん 7923.5

平成19年度 1位 にんじん 8807.8

2位 長ねぎ 7115.3

3. 一別紙3

学校給食地元野菜等供給品目(供給量順) 単位:Kg

平成20年度			平成19年度		
1	長ねぎ	9422.5	1	<u>にんじん</u>	8,807.8
2	<u>にんじん</u>	7923.5	2	玉ねぎ	7,115.3
3	大根	6975.4	3	じゃがいも	6,251.0
4	玉ねぎ	5357.9	4	長ねぎ	5,421.9
5	じゃがいも	4360.7	5	キャベツ	4,580.6
6	キャベツ	3924.8	6	大根	4,568.9
7	小松菜	3293.7	7	小松菜	2,341.0
8	梨	2688.9	8	トマト	1,793.6
9	米	2628.0	9	白菜	1,716.7
10	とうもろこし	2099.0	10	ほうれん草	1,577.6
11	白菜	1822.0	11	とうもろこし	1,557.0
12	トマト	1466.3	12	米	1,292.0
13	里芋	1323.3	13	さつまい	1,200.1
14	さつまい	1256.5	14	梨	613.3
15	ほうれん草	1049.7	15	かぼちゃ	594.2
16	ごぼう	684.5	16	ごぼう	434.6
17	かぼちゃ	537.8	17	里芋	402.2
18	ブロッコリー	436.0	18	きゅうり	129.3
19	トウモロコシ	396.0	19	ナス	104.8
20	きゅうり	356.1	20	チンゲン菜	93.7
21	とうがん	198.0	21	たくあん	77.0
22	紫いも	115.0	22	ブロッコリー	72.0
23	たくあん	105.0	23	いんげん	35.1
24	もち米	83.0	24	ピーマン	17.5
25	にんじん	70.0	25	カリフラワー	17.0

<学校給食月別品目別出荷量> 単位 Kg

平成21年度 1位 にんじん 12088.1

2位 たまねぎ 8562.5

3. 一別紙4

平成21年度 学校給食月別品目別出荷量(全地区)

No.	品名	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月
1	にんじん					7.0	1,762.3	2,424.7	2,311.0
2	玉ねぎ			5,162.5	3,397.0	3.0			
3	長ネギ	40.0	46.0	15.0		157.0	1,042.5	1,419.1	1,841.0
4	じゃがいも			2,602.5	2,966.0	542.0			
5	キャベツ		221.0	1,221.0					
6	大根		103.0				338.8	1,596.6	2,071.0
7	小松菜		183.0	242.2	101.0	379.0	586.3	480.8	711.0
8	白菜		80.0					478.0	811.0
9	米							825.0	811.0
10	トマト		550.3	539.5	506.5				
11	梨					963.1	574.8		
12	さつまい					22.0	926.5	458.1	
13	いちご								
14	里芋						218.0	291.5	511.0
15	とうもろこし			186.0	914.0				
16	ほうれん草						65.3	118.1	111.0
17	かぼちゃ			22.0	367.0	61.0			
18	ごぼう						72.7	182.9	111.0
19	とうがん					176.0	177.0		
20	ムラサキ芋							124.0	
21	ナス				191.0	42.0			

(馬鳥 誠)

(3) 日野の町探検

ふしぎたんけんふれあいたんけん

(第2学年 生活)

1. 教材化の意図

仲田小の近隣には日野宿本陣を始め、精進場や馬頭観音など昔から残るものが数多く存在している。本校では第4学年の総合的な学習の時間に地域の昔について調べ学習を行っている。

そこで第2学年ではその準備段階として学校周辺の地域を探検して、地域のお店をグループで訪問する活動を行った。地域には歴史のある店や、昔の学校の校門跡のある図書館などがあり、地域の歴史に触れる機会にもなる。また、地域の昔について表示している看板、地蔵、明治時代の建物などを見て回る機会にもなった。

グループで地域をめぐり、そこで働いている方へのインタビューを通して自分の町に興味・関心をもって知ろうとする態度を育て、地域の人たちとのかかわりやよさに気付かせたいと思い、本単元を設定した。

2. 指導計画

第2学年 生活科 「ふしぎたんけんふれあいたんけん」

(1) 単元のねらい

自分たちの町に興味・関心をもち、見たり調べたりして、地域の人たちと自分のかかわりやそのよさに気付く。

(2) 単元指導計画

	主な学習活動と内容	備 考
つ か む	行きたい場所を探そう ・自分の町のお気に入りの場所を発表する。 ・お気に入りの場所カードを記入する。 みんなで探検しよう ・学年で町歩き活動を行い、訪問したい所やインタビューしたい所を探す。 グループで話し合おう ・探検したい目的地を中心にグループを作る。 ・インタビューしたい内容について話し合い、探検カードに書く。	・通学路にあるお気に入りの場所を発表させる。 ・町にある地蔵や地域にまつわる逸話などについても知らせるようにする。 ・保護者にも付き添いをお願いし、事故などに注意してもらう。 ○探検の目的を理解し、グループの仲間と協力しながら探検の計画を立てていたか。

深 め る	探検の準備をしよう ・質問したいことや、調べたいことなどを話し合う。 ・グループ内での係分担を話し合う。 ・交通安全やお店などでのマナー、話し方、困ったときの対応などを話し合う。	・探検中の安全確認、お店に入ったときの挨拶、インタビューの手順、帰る時の挨拶などについて考えさせる。
	探検に出発しよう ・町探検の準備を確認し、グループごとに町探検に出かける。 ・安全面に関する約束や挨拶などのマナーを確認する。 ・お店の方にインタビューを行い、カードに記入する。	・グループごとに保護者が付くようにし、移動やインタビュー時の安全、マナーについて見てもらう。 ・教員は児童の様子を見てまわる。 ○地域の人や場所などさまざまなものに興味をもち、積極的にかかわっていたか。
ま と め	新聞にまとめよう ・インタビューを記入したカードを参考に町探検で分かったことをグループで話し合い、新聞にまとめる。 ・新聞にまとめたことをクラスに発表する。	・グループのメンバー一人が最低一つ以上の記事が書けるようにする。 ○探検で知り合った人、お店についてわかったことや気づいたことなどを自分なりの記事にして表現できたか。

3. 本時の指導

(1) ねらい

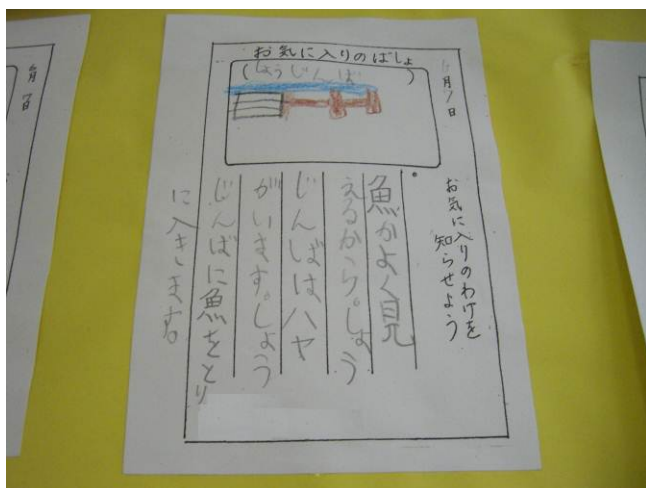
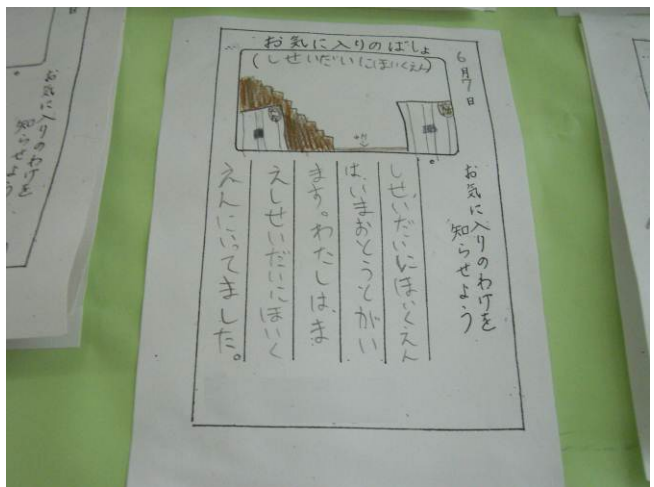
働く人たちへインタビューして町の様子やそこに住んでいる人たちなどについて調べる活動を通して、地域と自分のかかわりやそのよさに気付く。

	学習活動	○支援 △評価
導 入	1. 前時までの活動を振り返り、本時の学習のめあてと流れを確かめる。	○本時の活動について見通しがもてるよう学習の流れを確認する。
	町探検で質問することを決めよう	

展開	2. 自分の質問したいことを考えてワークシートに記入する。 3. 訪問先ごとのグループに分かれ、質問の仕方や内容について話し合う。話し合いを通してグループで聞く質問を決定して、質問カードにまとめる。	○質問の仕方を例示し、考えや気持ちを入れて質問する良さに気付くことができるようにする。 △自分の訪問するお店に関心をもって質問を考えているか。 ○インタビュー時のマナーや必要な挨拶などについても指導する。 △地域の様子などが聞き取れる質問を話し合って決めることができたか。
まとめ	4. 本時の活動を振り返り、次時への見通しをもつ。	○次時は探検の仕方や約束について話し合う活動であることを伝え、意欲を高める。

4. 町探検の様子

●お気に入りの場所カード



お気に入りの場所の発表では仲田小学校の周辺にどのようなものがあるかをクラスで確認した。よく遊びに行く場所や、自分や家族にゆかりのある場所など、様々な場所が挙げられた。これらを参考に学年で町を探検し、グループ探検の場所を決めていった。

●学年での町探検の様子



学年での町探検では自分で探検したい場所を歩きながら探すようにした。精進場や馬頭観音など昔から残っている場所で休憩を取るようにし、その際に、その場所にまつわる逸話を聞かせた。

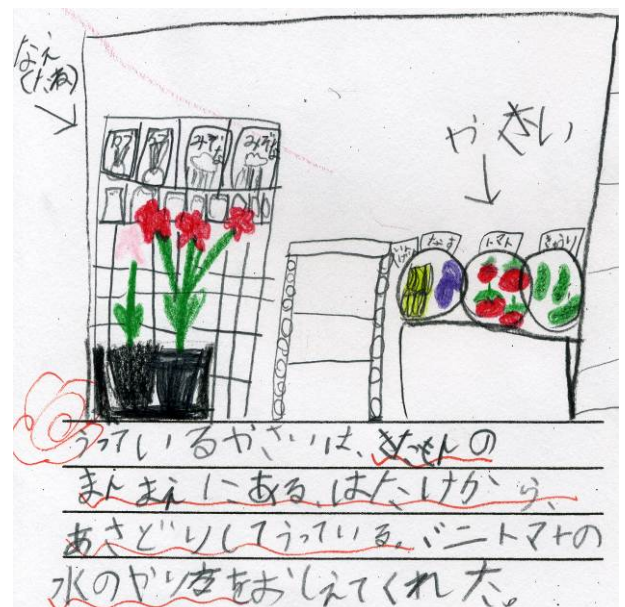
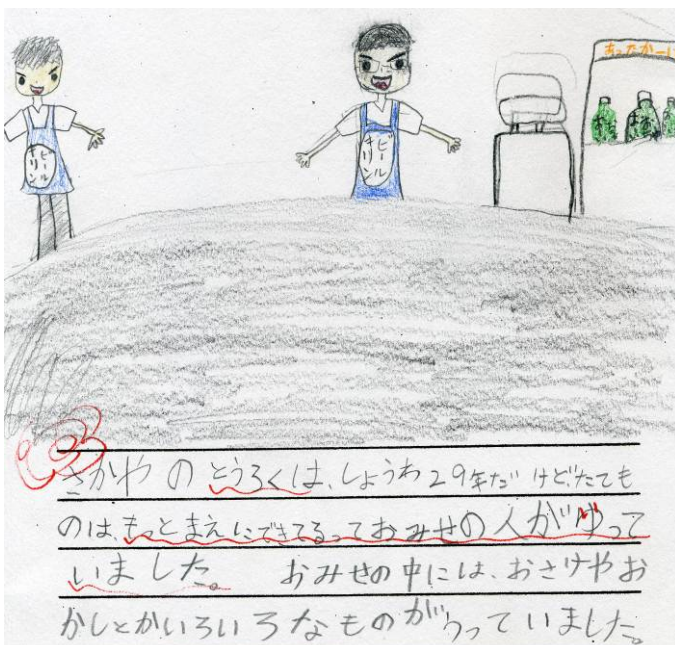
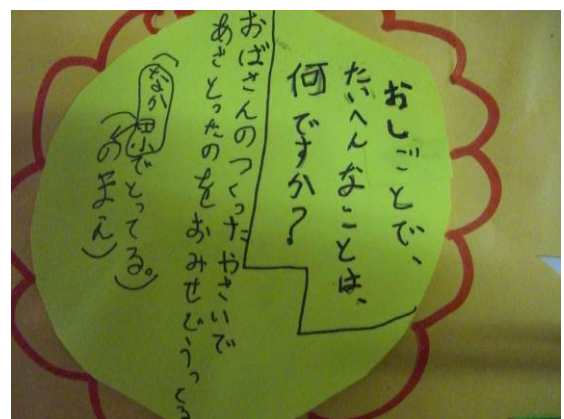
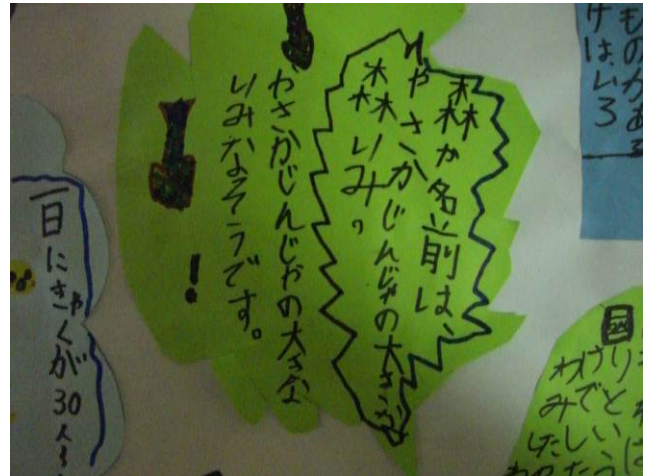
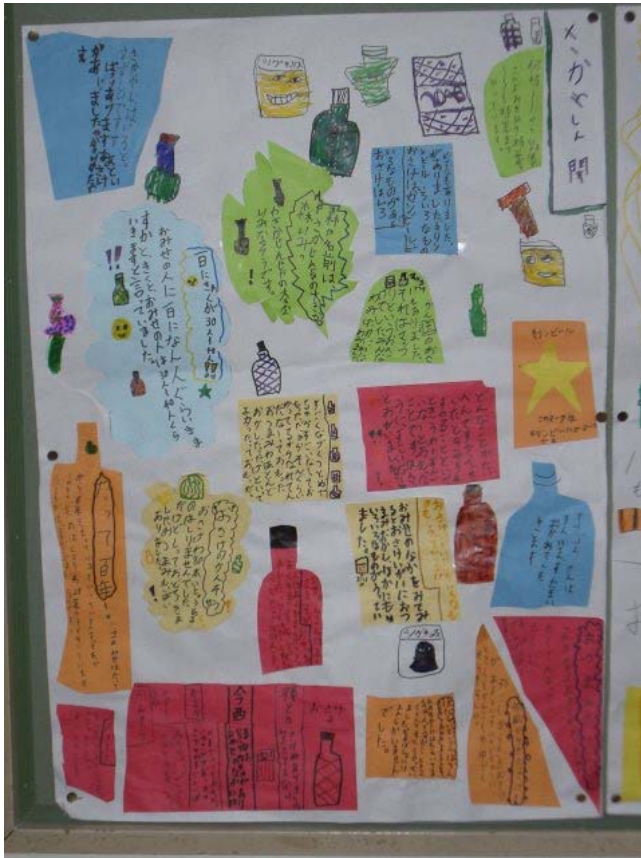
また、グループでの訪問前にどんなインタビューをするか考え、質問用紙にまとめた。これにより今まで知らなかった日野のよさや歴史に気づき、興味をもってグループ別の町探検に臨むことができた。

●グループ別探検



グループ別の町探検では事前の打ち合わせで係分担を行い、あいさつやメモ、質問などの仕事を協力して行った。活動を通してわかったことや思ったことなどを個人で「あのねカード」に記入させ、グループで町探検新聞にまとめた。

●町探検新聞、あのねカード



グループ別の町探検で分かったことや気づいたことを記事にして町探検新聞づくりを行った。また、個人でもわかったことをあのねカードにまとめた。

あのねカードには訪問先の酒屋に 100 年以上の歴史があったことに対する驚きや花屋の店先に並んでいる野菜が学校の北門の前にある畑で作られていることをわかったこととして記入されていた。

町探検新聞は多くのグループで、あのねカードに書いてあることと同じ内容を記事にしている。

町たんけん（名前）	はん	町たんけん（名前）	はん																									
いくところ、		いくところ、																										
○どんなしつもんをしたいかかんがえましょう。 <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td style="height: 25px;"></td></tr> <tr><td style="height: 25px;"></td></tr> <tr><td style="height: 25px;"></td></tr> <tr><td style="height: 25px;"></td></tr> <tr><td style="height: 25px;"></td></tr> <tr><td style="height: 25px;"></td></tr> <tr><td style="height: 25px;"></td></tr> <tr><td style="height: 25px;"></td></tr> <tr><td style="height: 25px;"></td></tr> <tr><td style="height: 25px;"></td></tr> </table>												<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td style="height: 25px;">しつもん</td></tr> <tr><td style="height: 25px;">こたえ</td></tr> <tr><td style="height: 25px;"></td></tr> </table> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td style="height: 25px;">しつもん</td></tr> <tr><td style="height: 25px;">こたえ</td></tr> <tr><td style="height: 25px;"></td></tr> </table> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td style="height: 25px;">しつもん</td></tr> <tr><td style="height: 25px;">こたえ</td></tr> <tr><td style="height: 25px;"></td></tr> </table> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td style="height: 25px;">しつもん</td></tr> <tr><td style="height: 25px;">こたえ</td></tr> <tr><td style="height: 25px;"></td></tr> </table> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td style="height: 25px;">しつもん</td></tr> <tr><td style="height: 25px;">こたえ</td></tr> <tr><td style="height: 25px;"></td></tr> </table>		しつもん	こたえ		しつもん	こたえ		しつもん	こたえ		しつもん	こたえ		しつもん	こたえ	
しつもん																												
こたえ																												
しつもん																												
こたえ																												
しつもん																												
こたえ																												
しつもん																												
こたえ																												
しつもん																												
こたえ																												

5. 成果と課題

本指導における成果は、地域の店にインタビューをすることにより、身近にある店が100年以上も昔からあり、店名の由来が八坂神社の森であることや、花屋の店頭に並んでいる野菜が学校の隣の畑で作られていて、学校の畑も世話をしていたらいいことを子供たちは知ることができたことである。その結果、地域は古くから発展していた町であることに驚きを感じ、学校の畑を大切にしようとする心情が育った。このように、直接話を伺うことは地域のことについての知見を広げ、愛着を持つことに効果があることが分かった。

課題点の1点目はインタビューの内容が店の仕事に関する質問が多く、自分の住む町についての話をあまり聞けなかった点である。インタビューにどんな質問を入れたらいいかについての指導が不足していた。2点目は、探検した場所を地図を使って示すように指導した方が地域とのかかわりを明確にすることができたという点である。

（森田誠司）

（４）日野の昔話を活用した授業 「むかしのくらし」

（第３学年 社会科）

１．教材化の意図

日野市域は、明治 22 年の町村合併によって、日野宿、七生村、桑田村の一宿二村となった。当時は養蚕が盛んな地域であった。明治 30 年代には、畑の約 3 割が桑園で占められていた。養蚕は農家の収入における大半を占めており、蚕は「オコさま」と呼ばれ大切に扱われていたという。本単元では、児童が生活している地域の「むかしのくらし」を、そのような昔の情景を思い浮かべて学習できるようにしたいと考えた。

本校の児童は、第 1 学年の国語科において「日野の昔話」を用いた学習を行った。日野の昔話に慣れ親しむことができた。本単元では、その体験を生かし、「日野の昔話」を導入に使用した。養蚕が盛んに行われていたころの昔話を授業で活用することにより、児童が昔のくらしをより身近に感じられるようにした。教材化に際しては、「日野の歴史と文化 日野の昔話 特集号（一）」を参考にした。第 3 学年で昔話を使用する際には、児童に昔の雰囲気味わうことができるように地元の方言を生かした話を作りあげた。また、昔話を電子黒板で使用して視覚化することにより、昔の暮らしの様子や道具に興味・関心をもてるようにした。

２．指導計画

（１）単元のねらい

古くから残る暮らしに関わる道具や、それらを使っていた頃の暮らしの様子について調べ、地域の人々の生活の変化や願い、地域社会のよりよい発展について考えることができるようにする。

（２）単元の指導計画（12 時間）

過程	学習活動	備考 ◎評価
課題を見つめる 2 時	○日野市に伝わる昔話の再話を聞き、日野の昔の生活の様子を想像する。	○日野市の昔話の絵本で朗読し、昔の情景を考えさせる。
	○昔に使われていた道具のイラストに出てきた、道具を見たり触れたりして、何のためにどのように使われていたか考える。	○郷土資料館から「ザクリ、蚕、草履、傘」を借りる。 ◎地域の人々の生活の変化に関心を持ち、生活の変化を意欲的に調べている。
追究する 8 時	○日野市郷土資料館で、昔の生活で使われていた道具を見学したり、触れたりして道具の使い方調べる。	◎疑問に思ったことを解決しようとしている。
	○昔の道具を実際に使い、気付いたことをまとめる。 ○昔の生活と今の生活の違いや昔の人の暮らしの工夫について考え、カードや年表にまとめる。	◎意欲的に地域の人々の生活の変化について必要な情報を集め、カードにまとめることができる。 ◎観点に基づいて、地域の方から聞き取り調査をして、人々の生活の変化について必要な情報を集め、カードにまとめている。

深める 2時	○昔の生活の中で、工夫していることについて気づいたことを発表する。	◎古くから残る暮らしに関わる道具を使っていたころの暮らしの様子について、人々の願いや努力によるものであることを理解している。 ◎地域の人々の生活の今昔の違いや変化、人々の生活の知恵を考え具体的に表現している。
-----------	-----------------------------------	---

3. 本時の指導

(1) 本時のねらい

日野市に伝わる昔話を聞き、昔の生活の様子を想像し、疑問に感じたことやもっと知りたいことを整理し、課題を見つけることができる。

(2) 本時の展開(1/12 時間)

	学習活動	○支援 ◇評価
5 導入 分	○昔話の読み聞かせを聞き、昔の様子に関心をもつ。(キツネに化かされた話)	○昔話のスライドショーを、電子黒板で掲示する。昔の暮らしの様子を想像させる。
展開 30分	○昔の様子の描かれているイラスト(教科書の挿絵)を見て、昔の人々が使用していた道具を探し、ワークシートに記入し発表する。 ○昔の人々がどのような道具を、どのように使って暮らしていたのかについて、気づいたことをワークシートに記入している。	○昔話に登場した道具を、実際に掲示し、児童に使い方を簡単に紹介する。(道具は郷土資料館から借りる。) ○再話したイラストをもとに、昔の暮らしを具体的にイメージさせる。 ○「教科書の絵の中から、かま、おひつ、せんたく板とたらい、ひしゃく等の道具を見つけよう。」「ほかにはどんな道具があるか探し、発表しよう。」 ◇昔の生活に関心をもって取り組んでいる(ワークシート)
	古い道具を使っていた頃の人達の暮らしは、今と比べてどんな様子だったのか。	
	○古い道具とそれらを使っていた頃の暮らしの様子について予想し、話し合う。	○イラストや写真をもとに、昔の暮らしを具体的にイメージさせる。 ○昔の暮らしの様子を今の自分たちの暮らしと対比させたり、結びつけたりする視点をもつよう助言する。 「道具のほかにも、絵を見て気づいたことを記入して発表しよう。」
1 まとめ 0分	○調べたい課題をワークシートに記入し、発表する。	◇昔の生活に興味・関心をもつことができる。(ワークシート・発言)

〈資料〉

〈昔の道具を実際に見たり触れたりした際の児童の反応〉

昔の道具を実際に見たり触ったりして気づいたこと発表した。絹に対しての意見では、絹糸ができてから何十年もたっているのに、綺麗なことや手触りが良いことに対する驚きの声が多くあった。さらに、手作りで丁寧に作られているから長持ちしているのではないか、といった新たな疑問も出た。

ざくりについても、釘を使わずにどうやって組み立てられているのかと、驚きや疑問が多く出た。また、昔は電気がないため、電気を使わずに動く機械が使われていたのではないかといった当時の暮らしの様子について想像し、新たな疑問を見つけることができた。



日野にゆかりのある昔話を使用することにより、昔の暮らしの様子を想像する効果があった。また、昔話に登場する昔の道具を実際に見たり触れたりすることにより、当時の暮らしの様子に対して新たな疑問がわくことが分かった。

資料① 再話資料

昔話を選定する基準は、①昔の日野の様子が書かれていること。②内容が児童にとって分かりやすいこと。上記の2点を留意して選んだ。

再話に際しては、原文の味を生かすため、極力原文通りの文章にした。このことにより、昔の話し言葉や雰囲気を楽しむことができると考えた。

キツネに化かされた話

戦前の日野はコメ作りと養蚕の盛んな土地であった。そのころは買い物という八王子の町へ行く人が多かった。中央線に乗るか、甲州街道に行くかどちらかであったが、農家の男たちはたいてい日野の大坂を越えて日野っ原に出て、高倉を通り大和田へ出て八王子へたどりつくのだった。昔は日野の原には一軒も家がなくて、昼間でも薄気味悪いほどの畑と雑木林の続く道だった。この雑木林にはキツネやタヌキが住んでいて、なかでもキツネはよく人を化かした。年寄たちに聞くと「キツネにたぶらかされて、おらあひでえ目にあっただよ」と前置きしてはキツネに化かされた話をしてくれた。

大正の初め、隣のじいさんと二人で夏蚕があがって繭を打った代金をふところに、大和田の坂下の志村屋で一杯やってなあ、いい気持で、酒まんじゅうを風呂敷に包んで腰にぶらさげて、鼻歌を唄いながら、空の風呂敷をひっかけて日野っ原へさしかかっただよ。そこへ酒まんじゅうの匂いや酒飲みの息をかぎつけてキツネが後になり、先になりしてついて来たが、いい気持になった二人は気がつかなかった。ところが二人の前に突然川が現れたので、二人はこれはキツネに化かされたのかなと思ったが、目の前に川があれば渡らなければならないので、二人は着物やモモヒキをたくしあげ、草履を腰にぶらさげて川をわたり始めた。二人は足を持ち上げながら「おお深い、おお深い」と言いながら歩きまわっていた。するとたまたま通りかかった顔見知りの人が、この二人の様子を見て、笑いをこらえながら大きな声で二人の名をよんだ。

「おめえたちや何してんだよ。水ったまりの中でよう」呼ばれた二人ははっと我にかえり、水たまりの中をぐるぐる歩きまわっている自分たちに気がついた。はっと思って酒まんじゅうの包みをさがしたがみつからない。

「なんちゅう、めえめえしいことだんべ。キツネに化かされて酒まんじゅうを盗られちゃっただよ」と頭をかきかき話してくれた。キツネに化かされると思っているうちに自己暗示にかかってしまったのだろうか。

(故田中與吉氏談を再話したもの)



資料③ 授業風景

ワークシート例



昔のくらし

名前 ()

○お話の中に出てきた古い道具を見つけて、記入しよう。

○ぞうり	○おひつ
○せんたく板	○ひしゃく
○かまど	○せんたく板
○かま	○いんま
○いろり	○くすり
○火鉢	○おて玉

○昔の道具をつかっていた生活は、今と比べてどんな様子ですか？

例 かまどのお母さんは、火が熱そうです。料理を作るのが大変そう。
 ○せんたく板であらうと、1まい1まい手作りでやるので、大へん。
 ○おひつをさくさくおきたいなずつでいって大へん。
 ○お水をいれたいのが大へん。
 ○水をいれたいのが大へん。

○調べてみたい道具はなんですか？

※ かま・おひつ・せんたく板・ひしゃくなど。
 せんたく板につく

資料④ ザクリ・かさ・絹糸



4. 実践の成果と課題

成果

(1) 郷土資料を活用し、郷土愛を育むことができた。

児童にとって、日野市の歴史や文化を学ぶ経験は少ない。しかし、日野市を題材にした昔話を活用することにより、日野市の歴史や文化がより身近に感じることができた。

(2) 日野市の昔話をスライドショー化し、昔の様子を想像しやすくなった。

児童は昔話のスライドショーから、昔の様子を想像し、今と昔の暮らしに違いがあることを理解することができた。特に、昔の暮らしの様子の中で、電気・ガス・水道がないため生活が今とは全く違うということを、視覚的に感じ取ることができた。

(3) 昔話をデータ化することにより、教材の共有化ができた。

昔話の再話を教材化したスライドショーや指導案は、学校内の共有フォルダに保存を行った。教材を学校全体で活用することができるようにできた。

(4) 学校以外の諸施設との連携ができた

本単元は郷土資料館や図書館との連携により成り立った。郷土資料館からは、「ざくり・かさ・絹糸」など、日野の郷土資料を借りることができた。児童は昔の道具を実際に見たり触れたりすることにより、興味をもち理解を深めた。図書館では、レファレンスサービス（資料を探す手助け）を活用した。日野市の昔話を活用したいと申し出たところ、日野市の昔話を集めた資料をすぐに借りることができた。郷土教育の新しい教材作りは、郷土資料館や図書館との連携により効果的に作成できることが分かった。

課題

(1) 昔の道具に着目したが、昔の人々の思いや願いに気付くことができなかった。

本時では、昔話を再話し、スライドショー化することにより、道具に着目した授業展開ができた。しかし、昔の道具が不便であるという意見が多く出た。昔の人々の思いや願いに気付くことはできなかった。実際の道具を児童に触れさせる場面を増やし、道具の工夫に気付く授業展開を行うことが必要であると感じた。

(2) 教材の引き継ぎ

本単元で作成した資料を、次年度も引き継いでいくことが大切である。また、郷土教育で作成した資料だけでなく、関係機関との連携・協力の仕方も引き継いでいくことが必要である。これからの郷土教育の発展のためには、データ化した資料の活用方法を、次年度の学年に伝えていくことが大切な課題である。

参考文献 日野の歴史と文化 日野の昔話 特集号(一) 日野史談会 昭和 57 年

参考資料 郷土資料館より借用した民具 ザクリ・かさ・草履・蚕の繭・絹の糸 以上 5 点

(瀬川 敦)

（５）日野市の地名の由来と地形の特徴

（第３学年 社会）

１．教材化の意図

日野市には浅川と多摩川が流れ、低地、台地、丘陵地からなる、犬のような形をした市である。このような市の特徴を小学校３年生社会科の「日野市の様子」で学習する。低地には豊富に水が流れる用水を利用して田んぼが広がっている。台地には、広大な土地を利用して工場などが立ち並ぶ。そして丘陵地には、新しい住宅が並んでいる。それぞれの土地の形や特徴を利用して、人々は生活をしているのである。日野市の地形の特徴を知ることが、その土地の農業や工業などの産業や人々の暮らしを知る上でとても重要である。しかし、私が以前に教えた児童は地形の特徴をただ暗記してしまう児童が多く、地形の特徴を生かして生活点や、特徴と土地の利用を関連付けて理解している児童はあまり多くなかった。

そこで、日野市の地形を児童にとってより身近に感じさせるために日野市の地名に焦点を当てながら地図を見ていくことを考えた。児童が、自分の住んでいる町の名前を調べ、町の名前と地形の特徴がどのように関連しているのかを調べることで、地域に対しての愛着がわき、地名と共に土地の利用の仕方を理解できるのではないかと考えた。



- ・日野
- ・旭ヶ丘
- ・日野台
- ・日野坂



**地形の特徴を
表す地名が
多い**



2. 指導計画

(1) 単元のねらい

- ①学校のまわりや市の地形や土地利用の様子、主な公共機関や交通の様子などについて関心をもち、自ら進んで観察・調査したり、資料を活用したりして調べようとすることができる。
- ②学校のまわりや市の場所による様子の違いや特徴について「地形」「土地利用」「交通」などの観点から考えることができる。
- ③学校のまわりや市の様子は、場所によって地形や土地利用の様子などに違いがあることを地名と関連させて調査し、その特徴がわかる。

(2) 単元の指導計画

	ねらい	学習活動	資料等
つかむ	◎四方位の表し方がわかる。	○日野市の地図を開き、周りに何があるかを確認し、四方位を確認する。	・日野市の地図 ・方位磁石
	◎学校のまわりにどのようなものがあるか屋上から観察して確かめることができる。	○屋上の北側から見える様子をスケッチし、見えたものをメモする。 ○屋上から見える様子を方角ごとにスケッチし、見えたものをメモする。	・方位磁石 ・バインダー
	◎屋上で観察した学校のまわりのようすをまとめることができる。	○屋上で観察して見えたものを話し合い、学校の東西南北に何が見えるか考える。 ・学校の北に工場が多い。 ・学校の東には畑が多い。 ・学校の南にはマンションがたくさんある。 ・学校の西には工場と病院が見える。	
	◎日野市の地図使い、日野市にはどのような地名があるのか調べることができる。	○日野市の地図を使い、日野市の中にある地名を見つける。 ・台が付く地名を見つける。 ・丘が付く地名を見つける。 ・田が付く地名を見つける。 ・地名に特徴がある理由を予想する。	・日野市の地図

し ら べ る	◎日野市の地名の由来と学校の周りのようすをくらべて特徴をまとめることができる。 ◎学校のまわり以外の地名を調べ、土地の様子を予想することができる。 ◎町探検に出かけ、市内の土地の使われ方の様子を調査することができる。 ◎町探検で見つけたものを記録から整理することができる。	○日野市の地名の由来を調査する。 ○日野市の地名の由来から自分の住んでいる地名の由来を調べる。 ○地名の由来と土地の使われ方の特徴をまとめる。 ○学校の周り以外の地名を調べ、地名の由来から土地の使われ方を予想する。 ○町探検に出かけ、自分の予想した町の様子と実際に見た町の様子とを比べ、記録をする。 ○町で見つけたものの記録を整理し、まとめる。	・日野市の地名の由来 ・日野市の地図 ・日野市の地名の由来
ま と め る	◎町探検の記録をもとに、日野市の土地の使われ方の様子を絵地図にまとめることができる。 ◎絵地図にまとめたものを発表し、交流することができる。	○町探検の記録をもとに、日野市の土地の使われ方を地図に表し、まとめる。 ・田んぼや畑が多いところは緑でぬる。 ・住宅が多いところは黄色でぬる。 ・工場は赤でぬる。 ・自分の予想は赤のカードに書き、地図に貼り付ける。 ・調べた結果は青のカードに書き地図に貼り付ける。 ○友達と発表を交流して日野市の土地の使われ方をまとめる。	・日野市の白地図 ・記録カード

3. 資料

(1) 昔の日野坂の様子

平地と台地の地形の違いを実際に見るのは大きい建物も多く難しい。児童にとっても体感しにくいところであり、地図上や教科書の中での理解だけになってしまいがちである。

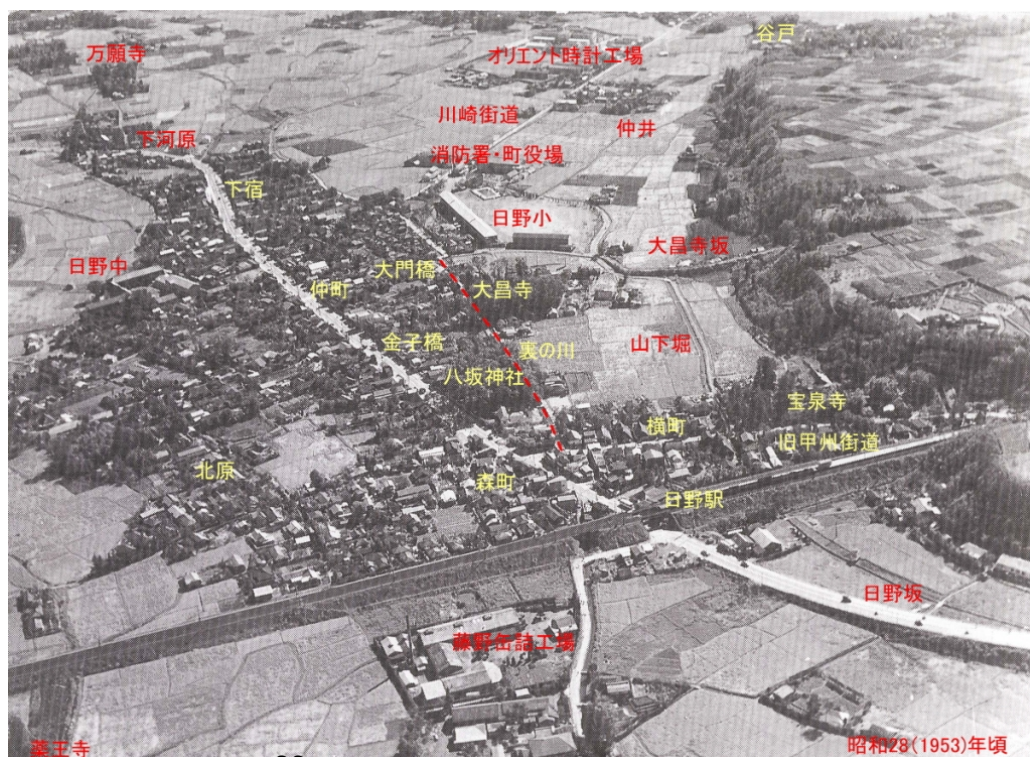
ここで活用したいのが古い町並みの日野市の写真である。建物がまだ少なく、地形の様子がとてもよくわかる。右の写真は今の日野坂バス停付近の写真である。柵の奥に一段高くなっている様子を見ることができる。右の写真は今と昔の日野坂の様子である。昔の写真は建物がなく台地が一段高くなっている様子が現在よりもはっきりとわかる。当時の写真から児童の驚きを引き出すとともに、当時の人が日野坂と名付けた気持ちを共感できればと考えた。



(2) 昭和23年頃の日野駅周辺の写真

台地が一段高くなっている様子がとてもよくわかるのが下の昔の日野駅周辺の写真である。駅を中心に住宅が並んでいる様子と共に、田んぼが並び低地の様子がよく表れている。また写真右側には台地が広がっており今では見ることのできない低地と台地の境目を観察することができる。

これら日野市の昔の写真は日野市の図書館のホームページ「日野写真散歩」から探すことができる。



(3) 「日野市」の名前の由来

日野の地名の由来は諸説あるが、最も有力な説がのろしがもとになった説である。『武蔵名所図絵』によると、昔この地を多摩郡石津郷飛火野と呼んだとある。この「飛火」とは「のろし」のことで、非常事態が起こった時に、通信の手段として用いられたものである。この日野の高台は、四方の眺めの良いところで、「のろし」をあげるのに適していたので、「のろし」の台が築かれていたことから、飛火野という地名がつき、その後和銅年間には、「火野」と改められ、次いで「日野」となったという説が有力ある。和銅とは奈良時代の事であり奈良時代から日野という地名が付いていることは驚きである。

もう一つの説としては、地名に日がつく場所は日当たりのよい土地に多い地名である。これらは日射を十分に受ける丘陵や平野の地名を意味するものが多い。

この日野もやはり、多摩川、浅川の両河川にはさまれた日当たりのよい台地を「日のよくあたる野」「日野」と言ったものであろう。

日本全国にある日野という地名は西の台地を背にした東斜面の極めて日当たりのよい地形をさすことが多いそうである。

『日野町誌 P 28、29』

『多摩歴史散歩2』

『日野の地名由来』図書館のピンクファイルより

『広報ひの 1997年4月15日号』

(4) 市内の地名の由来

『日野市の地名の由来 日野第二小学校 郷土クラブ』 図書館の青ファイルより

石田・・・むかし、石が多い田んぼだったから、石田とつけられた。

三沢・・・むかし、沢の谷合、三つの沢があったからつけられたそうです。

堀ノ内・・・掘りの内側にあたるところを堀ノ内とつけられた。

滝合・・・滝の流れ込みにあたるところだったので滝合とつけられた。

万願寺・・・その所に万願寺という寺があったのでつけられた。

上田・・・上の方に田んぼがあったので上だとつけられた。

栄町・・・町が栄えるようにという思いでつけられた。

旭ヶ丘・・・旭がのぼるように町が発展するようにつけられた。

南平・・・むかし、今の南平は平らな土地であり南の平らなところなので省略して南平と呼ばれるようになった。もともとは平村という名前であったが、八王子にも同じ名前があり、両者を区別するために明治12年に南平・北平とした。

高幡・・・源平時代に武士がここで戦勝を祈ってから奥州征伐に出かけた。その時、旗を高くかかげていたので高幡とよばれるようになった。

平山・・・昔、そこに平山という人が住んでいた。だから、その土地も平山という名になった。

(5) 市内の地名の由来2 『日野市史民俗編』より

豊田・・・昔、豊かな田んぼがあったから省略して豊田と名付けられた。豊富な地下水と浅川からの取水と水田に適していた土と相まって早くから稲作農業を育成した。豊かに実る田んぼの景観がそのまま村の名前になった。

川辺堀之内・・・地名から推測して、中世土豪がその館を構えたであろうと思われる。

上田・・・上田を氏とする上田三郎の本拠地であったことから村名がついた

万願寺・・・昔は日野宿の東方多摩川沿岸近く、にあり、石田・新井・下田と村境の班別が困難であった。もともと万願寺と呼ばれる寺があったのが由来とされるが、寺があったことははっきりしていない。

さくら町・・・小西六写真工業会社「現コニカミノルタ」の日野工場敷地で由来は同社の商標サクラの花からとったものである。

百草・・・昔は茂草と書いた。草の生い茂っている土地ということである。また、「クサ」という名のつく土地は、切替畑の跡地のことである」という研究もある。切替畑は焼畑ともいい、特にクサと名のつくような土地は同じ山側でも比較的肥えていて日当たりも良く、その他の天然条件も良い地域だということである。モトはおもての意味もあり、山のオモテのクサがモグサであったわけである。

(6) 市内の地名の由来3 『広報ひの』より

東光寺（栄町5・6丁目）

東光寺というお寺があったのが由来。町内番地整理の時になくなってしまった。今は東光寺小学校として名前が残る。残念ながら東光寺のお寺の詳細は不明。『広報ひの 1997年8月15日号』

泉塚（多摩平）

江戸時代のこと、豊田村と川辺堀ノ内村では村境についての争いがありました。この争いは3年間も続いたので豊田村代表の和泉という人は、神主に仲裁を頼みました。

その時、和泉は元は境界に杭があったが火事で焼けてしまったという言い伝えがある。掘ってみたら何か出てくるかもしれない」と言いました。そこで掘ってみると木炭が出てきたので、川辺堀之内村分はかなり食い込んだ形で境界が決まりました。しかし、これは和泉が一計を案じ後から埋めたものでした。川辺堀之内の人々は激怒し、豊田村に押しかけました。和泉は慌てて逃げましたが、畑でエンドウのつるに足を取られて転んだところを取り押さえられ、松の木に縛り付けられてついに殺されてしまいました。和泉塚の地名は、和泉が処刑された場所として伝えられています。また、塚はそれ以前からあったもので、近くに地下水が湧き出していたので塚の名をそうよんだという説もあります。現在は、交差点名（泉塚）として残っています。

『広報ひの 1997年』

湯沢（高幡台団地の東側）

高幡台団地の東南側の湯沢川に沿ったあたりは「湯沢」という字名（あざな）で呼ばれていました。現在も、湯沢福祉センター、湯沢橋などにその名残が見られます。

三沢地区は湯沢のほかに、中沢と小沢と合計3つの沢があるため三沢と呼ぶようになったということです。『広報 ひの 1998年1月15日号』

（亀田貴彦）

（６）旭が丘の雑木林を活用した授業

「雑木林に親しもう～炭焼きをして炭のよさを知ろう」

（第４学年 総合的な学習の時間）

１．教材化の意図

かつて、西平山・旭が丘地区は浅川河岸段丘に沿って「雑木林」が広がっていた。この地域は、周辺の村々の入会地であり、「秣場」と呼ばれる、馬や牛の資料、薪、肥料をとる葉や草等を集める場であった。このため、これらの場所は各村々の共有地となっていた。昭和 52 年、日野市で 18 番目の小学校として開校した「旭が丘小学校」の校地には、この「雑木林」がそのまま残され、さまざまな場面を通し教育活動の場として利用されてきた。また、地域にとっても大切な自然と触れ合う場であり、学校と地域が一体となって「雑木林」を活用していくことは、環境問題を考える上でも、ますます重要になっていくものと考えられる。

もともと「雑木林」は周辺の村々の生活を支える場であり、かつては「雑木林」の活用と自然保護は一体のものであった。肥料や燃料を確保することは、そのまま「雑木林」を活性化することであり、植物を育ちやすくするためにも、萌芽更新や枝打ち、下草刈り等が必要だったわけである。しかし、1960 年代以降エネルギーが石油へと移行すると「雑木林」はその役割を失い、人手が入ることなく放置され、宅地開発が進行するなかで荒れ果て、その自然環境が破壊されることになってしまった。

この「雑木林」の学校教育への導入は、「雑木林」自体の新たな活用であるばかりでなく、これまでの郷土の先人が自然を大切にしていた生活をしてきたことを理解させ、これからの環境問題を考える契機となると考えた。本単元では、この地域でも広く行われてきた「炭焼き」を当時とは違った簡便な方法ではあるが、実際に行い、そこから炭の良さについて考える中で、環境問題への関心を高めさせていこうと意図している。



旭が丘小学校の雑木林

2. 指導計画

(1) 単元のねらい

- ①雑木林の木を使った炭焼きを行い、それを通して昔の人の知恵を学び、環境問題への関心を高める。
- ②炭を使って炭の良さを知る。

(2) 単元の評価内容

学習方法に関すること (自分が関心をもったことを追究するための学習方法を見つける力)	・友達と協力して雑木林の木を使って炭焼きを行い、それを記録していくことができる。 ・体験したことを記録し、それを自分なりの考察も加えてまとめることができる。
自分自身に関すること (自分の課題を追究し続ける意欲)	・炭について調べみたいことを決め、それを深めていくことができる。
他者や社会とのかかわりに関すること (自分と社会、自分と昔の人とを関係づけていく力)	・雑木林の手入れや炭焼きを通してむかしの人の知恵を学び、今の自分たちの生活をふり返る事ができる。

3. 単元について

本校の4年生のあさひタイム（総合的な学習の時間）では、雑木林にかかわる活動が2つ設定されている。一つはなかよし活動でペアを組む2年生の兄弟学級とともに雑木林で遊ぶ「雑木林ウォークラリーを計画しよう」という活動であり、もう一つが、今回の「雑木林に親しもう～炭焼きをして炭の良さを知ろう」である。どちらも本校のたからものである雑木林に親しむ活動であるが、前者が雑木林を遊びの場として活用する活動であるのに対して、今回の活動は、雑木林を歴史的な観点からとらえ、とくに炭を通して昔の人の知恵に気づかせることをねらいとしている。ゲストティーチャーを招いたり、体験的な活動を設定したりして、より児童の学習意欲を高めていきたい。

4. 教材化の視点と手立て

①地域の自然や人とかかわりを大切にした学習活動の工夫

- ・雑木林を手入れすることで、自然に親しむ態度を養う。
- ・炭焼きを行うことで、雑木林を生活の中に生かす方法について学ばせる。

②気づきを大切にし、探求的な学習を取り入れた学習指導の工夫

- ・炭についてより深く調べてみたいという気持ちをもたせるためにゲストティーチャーからお話を聞く場を設ける。
- ・炭焼きや炭を使った体験活動を行う中で児童の探求的な学習を深めていく。

5. 指導計画

	時	主な学習活動	●指導上の留意点・支援 ○評価【内容】(方法)
課題意識をもつ	1 2 3	・「雑木林に親しもう」の流れを知り、炭について調べてみようという意欲をもつ。 ・雑木林の手入れや炭作りについて、絵本などをもとに調べる。	●単元全体の見通しをもたせる。 ○炭について調べてみたいことを見つけることができる。【学習方法】ワークシート
情報収集1	4 5	・炭焼き体験を行う。	●炭焼きをしているときの煙の色の変化など、観察するポイントを児童に伝えておく。 ○友達と協力して雑木林の手入れや炭焼きを行い、それを記録していくことができる。 【学習方法】ワークシート
情報収集2	6 7	・焼き餅で、炭焼きと電子レンジでの違いを調べる。	●昨年行った七輪体験を思い出させ火のおこし方、もちの焼き方について考えさせる。 ○友達と協力して炭に関する実験を行い、それを記録していくことができる。 【学習方法】ワークシート
整理・分析・思考	8 9	・雑木林の手入れについて考える。 - 小原さんの話を聞く。 - 雑木林の本をもとに学習する。	●用務主事の小原さんに昔の人が行っていた雑木林の手入れについて話してもらう。とりわけ「萌芽更新」について説明してもらう。 ○小原さんの話を聞いて考えたことをまとめることができる。【学習方法】ワークシート
まとめ	10 11	・むかしの写真をもとに雑木林が今でも残っている「はけ」を歩き、昔の旭が丘の姿を想像する。 ・本単元全体を通しての成果を見つける。	○雑木林の手入れや炭焼きを通してむかしの人の知恵を学び、今の自分たちの生活をふり返る事ができる。【他者や社会】ワークシート

6. 本時の展開

(1) ねらい

萌芽更新のよさについて考え、昔の人の知恵に気づくことができる。

(2) 展開 (9 / 11)

学習活動	留意点 評価
学習課題 萌芽更新のよさについて考えよう	
○小原さんの話を思い出す。 萌芽更新 新芽 20年1サイクル ○萌芽更新をする第1のよさについて考える。 切られた幹はどうなるのか 炭 薪 葉は何に利用されるか 肥料(腐葉土) 第1のよさ 切られた幹は炭、薪などに活用される。 ○萌芽更新をする第2のよさについて考える。 幹を剪定した後、もとの木はどうなるのか 新芽が出てくる 第2のよさ 切られた木は新芽を出し急速に成長する。 ○萌芽更新をする第3のよさについて考える。 幹を剪定した後、周りの木にとって良いことを考える。 日当たりが良くなる。 第3のよさ 雑木林の中の日当たりがよくなる。 ○萌芽更新をする第4のよさについて考える。 小原さんが言っていた20年1サイクルとは何のことなのか考えさせる。 20年でもとの大きさの木に戻る 雑木林の木は減っていかない。 第4のよさ 雑木林の木はなくなるらない。	・小原さんの教えてくれたことで覚えていることを発表させ、黒板に書きとめていく。 ・炭焼き体験を思い出させる。また、炭焼きで使った薪も雑木林で手に入れた小枝だったことに気づかせる。 ・菊を植えたことを思い出させる。 ・1年で1メートルも成長することを教える。 ・雑木林をイメージして作った図を拡大して掲示し、幹を剪定してなくなった様子を図で確認させる。 ・社会科の水源林の学習でも日当たりを良くするための剪定について学習したことを思い出させる。 ・雑木林の図で1年に1本、20年で20本の木を切った様子を表現する。

○萌芽更新を行っていた昔の人の知恵について気がついたことをワークシートに書く。
昔の人は木の特性を良く知っていた。
昔の人もしサイクルしている。
○書いたことを発表する。

○雑木林の手入れや炭焼きを通してむかしの人の知恵を学び、今の自分たちの生活をふり返る事ができる。【他者や社会】ワークシート

7. 体験的な活動の様子



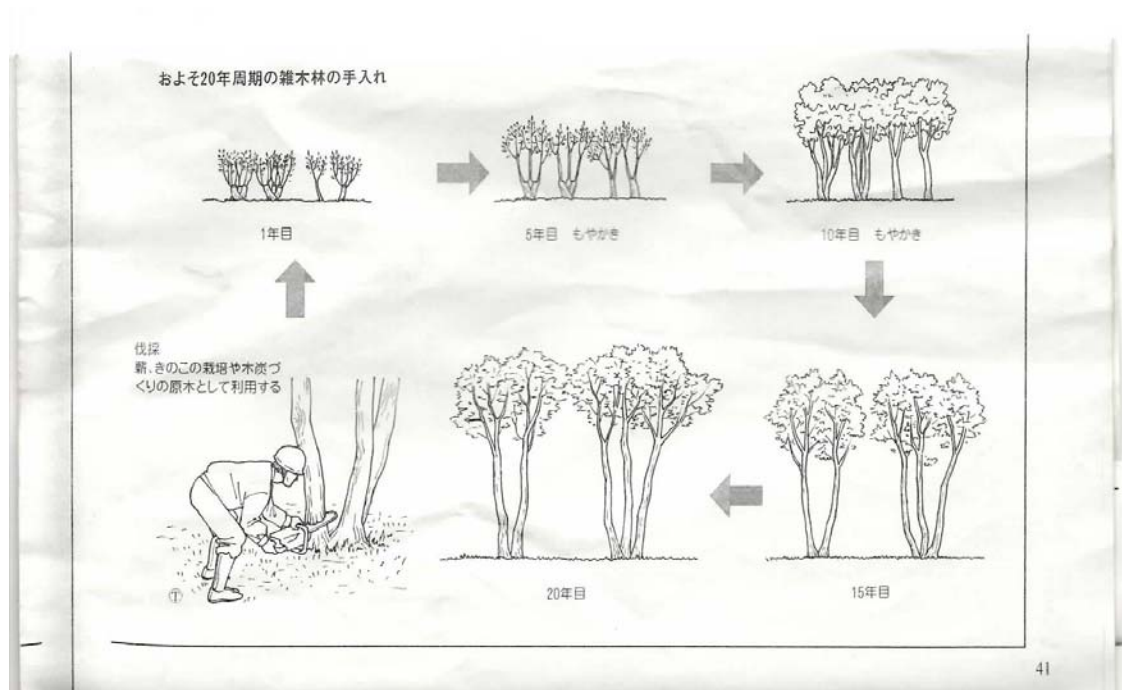
●クヌギをのこぎりで切っているところ



●かまどで蒸し焼きを行っているところ



●萌芽更新の話を聞いているところ



● 20年1サイクルで考える雑木林の活用の参考図

「森の手入れ、森のあそび」より

8. 成果と課題

成果

- ・3年生までは、学校にある雑木林は、木のたくさんある公園、遊び場としてとらえていたが、萌芽更新の話聞くことによって、昔の人にとってそこが生活の糧であることを理解することができた。
- ・実際に雑木林の木を炭にし、また、炭焼きをするための薪も雑木林の木を使うことによって、昔の人にとっての雑木林の役割をより実感することができた。
- ・ゲストティーチャー(用務主事の小原さん)から雑木林の萌芽更新の話聞くことによって、昔の人の知恵を現代のエコロジーの考え方と比べることができた。

課題

- ・来年度、児童が5年生に進級すると雑木林にかかわる活動として雑木林の手入れを行うことになるが、来年度の活動が今年度の学習を発展となるよう、教師間の引継ぎを確実に行っていきたい。

9. 参考文献

森の手入れ、森のあそび 著者 中川重年 発行所 社団法人 全国林業改良普及協会
火と炭の絵本 炭焼き編 著者 すぎうらぎんじ 発行所 社団法人 農山漁村文化協会

(荒木聖男)

(7) お米作りを通した授業 「お米プロジェクト」 ～お米を育て、人と関わり、食に活かす～ (第5学年 総合的な学習の時間)

1. 教材化の意図

日野市はかつて「多摩の米蔵」と呼ばれたほど稲作が盛んな地域であり、田んぼを始めとする自然やそこに生息する生き物が豊かな場所であった。近年、急速な宅地化が進み、その影響は本校周辺の高幡地区も例外ではない。そんな中、本校地域には田んぼや自然環境を守り、後世に伝えていこうとする人々がいる。浅川潤徳水辺の楽校、農家の方や日野市緑と清流課の方々、PTAや地域の方々からなるスタッフである。この方々にご協力をいただきながら、本校5年生は毎年、総合的な学習の時間に米作りの体験を中心に学習を進めている。

潤徳小の魅力の一つに学校の敷地内を流れる用水路と、とんぼ池があげられる。これまでにとんぼ池や用水路、浅川での活動を十分に楽しんできた子供達だが、5年生では用水路を利用して造られている水田で米作りの体験学習をする。

米作りは、浅川潤徳水辺の楽校スタッフの方々にご指導をいただき、初まき、苗作り、田植え、草刈り、網掛け、稲刈り、脱穀までを本格的に行う。小さな種籾から、青々とした、芽が伸びていくことに感動し、裸足で入る水田の土の感触を楽しみ、真夏の草刈りで汗を流し、頭を垂れたずっしりと重い稲穂を刈り取る喜びを味わう。さらに、米作りの体験学習を通して一人一人が持った興味や疑問をもとに、調べ・まとめ・発表していく。

毎年行っているお米の学習であるが、自分達の手で愛情をもって育てたお米を収穫し、どう活用するのかを考えさせる学習に重きをおいた。また、浅川潤徳水辺の楽校スタッフを始めとする「地域の人」との関わりを体験的に学ばせることから、郷土に誇りと愛着をもった「ひのっ子」を育成することを意図している。



向島用水路とつながる「とんぼ池」



米作りを体験した田んぼ

※本校の「とんぼ池」は、財団法人・日本生態系協会主催「第一回全国学校ビオトープ・コンクール」において優秀校に選ばれた。年間を通じて学習や遊び場として子供達や地域の方々に利用されている。

2. 指導計画

第5学年 総合的な学習の時間 「お米プロジェクト」

(1) 単元のねらい

◎米作りを通して、米及び米を活用した食料にかかわることについて調べたり、取材したりしたことを、整理分析してまとめ、表現することを通して、お米の良さや大切さを学ぶ。

◎年間を通して、地域の方々と米作りをすることで、地域への愛着や田んぼを始めとする自然環境を守ろうとする気持ちを育む。

(2) 単元の指導計画（全30時間）

	ねらい	主な学習活動・学習内容	資料等(・)評価(○)
つかむ	◎米や米作りに関心をもつ。 ◎一年間の活動の見通しをもつ。 ◎課題を設定する	・J A東京南農業協同組合の水口さんの講話を聞き、メモを取る。 ・お米の育て方の映像を視聴する。 ・どんなお米を作りたいか理由を考えて、意見を出し合う。	○米や米作りについて関心をもっている。 ○根拠を考えて、適切な課題を設定している。
追究する	◎田植えの準備作業を知る。 ◎田植えの方法を知り、体験する。 ◎案山子作りをし、外敵から稲を守る ◎収穫の方法を知り、体験する。 ◎活用方法を考える。	・種もみをまく。 ・苗の生長を観察カードに記入する。 ・苗に交代で水やりをする。 ・田んぼ周辺の草刈りをする。 ・田植えの仕方を知り、田んぼに苗を植える。 ・体験したことを調査カードや感想カードに記録する。 ・田んぼ周辺の草刈りをする。 ・案山子のコンセプトについて話し合う。 ・班ごとに分担し、案山子作りをする。 ・稲刈りをする。 ・脱穀をする。 ・収穫した米の活かし方について、本やインターネットを使いながら考えまとめる。 ・マドレーヌ作りに必要な係を考え、贈る準備をする。 ・お世話になった方や被災地へ贈る。	○田植え準備作業や観察に意欲的に取り組んでいる。 ○田植え作業や振り返りの活動に意欲的に取り組んでいる。 ○稲刈り作業や振り返りの活動に意欲的に取り組んでいる。
まとめる	◎単元を通しての振り返りをする。	・調べたことや体験したことをどのように伝えたらよいかを考える。 ・発表会をする。 ・一年間の活動を振り返り、自分にできることを考える。	○これまでの活動を今後の自分の生活と結びつけて考えている。

3. 1年間を通しての学習の様子

4月 お米作りって何？（オリエンテーション）



オリエンテーションとしてJ A東京南農業協同組合の水口さんにご講話いただいた。「米」と言う字は八十八の手間をかけて作られた事に由来すること、種もみは最初に塩水に漬け沈む良いもみだけを使うことなど、お米作りとは1年でどんなことをするのか分かりやすく説明いただいた。

5月 種もみから苗へ



日野市環境情報センターの笹木さん指導のもと、種もみを苗床へまく作業を体験した。ここから1ヶ月近く朝、昼、帰りの時間、交代で水やりをした。

6月 田植え



ほとんどの子が初めての体験で泥んこになりながら苗を植えた。子供たちは、まっすぐに刺すことがここまで難しいとは思わなかったと口々に言っていた。また田んぼや水路にはカエルを始め多くの生き物がいることも学んでいるようだった。

7月～9月 田んぼの手入れ



7月～9月にかけては基本的に見守るだけだが、定期的に草刈りをしたり、成長の記録をつけたりした。学校では、お米についてもっと詳しく調べるために、本やインターネットを活用して学習した。夏休みには有志によって綱掛けを行った。

10月 案山子作り



スズメなどの外敵から稲を守ろうと案山子作りをすることになった。子供たちが工夫し作り上げた案山子を、日野市産業まつりの案山子コンテストに出品した。本校からは各クラス1体ずつ出品し、内一つは努力賞をいただいた。

11月 稲刈り



慣れない鎌の使い方を教わりながら稲刈りを行った。根本から10センチほどのところを一つ一つ丁寧に刈るのは思ったよりも重労働だった。

11月 脱穀



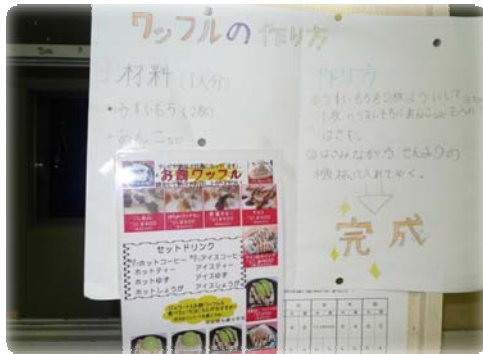
地域で農家をされている清水さんに脱穀についてのご指導いただいた。「はざかけ」しておいた稲を、一人何回も脱穀機にかけ、お米を収穫した。

12月 精米されたもち米が届く



田んぼの地主のご協力で、各クラス10キロ、合計約40キロのもち米をいただいた。

1月 地域のお店へ調査



高幡不動の商店街に出かけ、お店の方にもち米を使った調理方法があるかアドバイスをもらった。お店の方々からの情報、自分たちの想い、相手に喜んでももらえること、実際にできることなど様々な観点で話し合った結果、米粉を使ったマドレーヌを作ることになった。

1月 米粉にすることに成功



米粉は子供たちが本やインターネットで調べ、試行錯誤しながら作ることに成功した。

2月 Fujiau×潤徳5年が実現



調査に行ったお店の一つであるケーキや洋菓子で有名なFujiauさんが協力して下さることになった。思ってもみなかったことに、子供たちは大喜びだった。Fujiauシェフ指導のもと作成したレシピをもとに、米粉マドレーヌは上手に出来上がった。

2月 お世話になった方へ贈る



出来上がった米粉マドレーヌは、お米作りでお世話になった方や、福島県いわき市の被災された同じ5年生、先生方や家族に贈った。

4. 学習を通しての児童の感想（一部）

No. _____

お米作りと宅地化

潤徳小学校の五年生は今年、お米作りを体験しました。わたしがお米作りで学んだことは、二つあります。

一つ目は、お米を作るには、たくさんの方の協力が必要だということです。理由は、まず、田んぼを借りないとお米作りは、できないし、そもそも水口さんがお米の作り方などを教えてくれたなかったら、わたしたちは、今ごろ、お米を作、ていなかったと思います。

このことから、やはりたくさんの方の協力が必要だということですを学びました。

二つ目は、宅地化です。最近、東京には、少ない田んぼを住宅地にする所が増えています。わたしは、田んぼを住宅地にするのは、やめてほしいです。せめて自分達がお米を作った田んぼだけでも住宅地にはしないでほしいと思います。

No. _____

5. 成果と課題

◎成果

- ・米作りの体験から、日本人の主食である米自体に愛着をもつことができたり、見つめなおすことができたりしたこと。（今まで食卓に米が出てくるのが当たり前と思っていた児童も多く、米に対してここまで考えたり、体験したりする機会自体が貴重であった。）
- ・地域への愛着や誇りをもつ子が増えたこと。（浅川潤徳水辺の楽校スタッフの方々や FUJIIU さんなど、地域の方々の協力で米作りやマドレーヌ作りができた。児童はこれらを体験的に感じるができ、感謝の気持ちや地域に対する愛着をもつことができた。）
- ・児童が自ら主体的に考え、追究できたこと。（出来上がったもち米の活用方法を自分達で考え、どうしたら喜んでもらえるかの議論を重ね、自分達のできる精一杯の内容を実行できたこと。）

◎課題

- ・本校にとって貴重な存在である地域の方々と、これからどのように連携を図っていくべきか。（今年度は、FUJIIU さんの協力を得ることができたが、来年度以降どのように地域と連携を図っていくべきか。）
- ・6年生の総合的な学習の時間にどうつなげていくか。（今年度は米作りの体験を通して、米作りの大変さや地域の方々の温かさを学んだ。来年度に向け、さらに高幡の町の自然環境や高幡の町の姿容などにも目を向けさせるための方策が必要。）

(西沢 庸)

2. 新たに収集・開発した郷土資料・教材

(1) 軍配団扇と徳川家康（平山八幡神社）

1. 教材化の意図と概要

この平山八幡宮は、浅川の北、滝合橋の西方、杉木立に囲まれた小高いところにあって、暑い夏は木陰の涼しさにほっと一息つけるところです。

社殿は新しいですが、建立は文治年間（1185～1190）、この地を領した武者所平山季重が、鎌倉の鶴岡八幡宮を勧請して平山の鎮守としたと言い伝えられています。

毎年、9月の祭礼時には神社に伝承されている「軍配団扇」、これを納めていたと思われる「袱紗（ふくさ）」、それに「至道無難墨蹟（ぼくせき）」が一般に公開されます。これらは「八幡神社社宝（一括3点）」として日野市指定有形文化財に指定されているものです。

この「軍配団扇」は、徳川家康が関東へ入国（天正18年（1590）8月）し、領国を巡視しており、この平山八幡神社と平山季重の故事を聞いて、軍配団扇【うちわ】を寄進したことが伝えられています。

家康は、慶長8年（1603年）朝廷より征夷大將軍に任ぜられ、江戸幕府を開きましたが、この征夷大將軍に任ぜられるということは、源頼朝にはじまる鎌倉、室町に続いて武家の覇者としての全国の武士を支配する地位の正当性を裏付けることだったのです。また、この征夷大將軍になるには源氏の系統をひくものでなければいけなかったのです。鎌倉初期に活躍した平山季重は、源義朝、頼朝に仕え、勇名を大いにあげた武将でした。その季重が鎌倉の鶴岡八幡宮を勧請した平山の鎮守に、家康は末永き守護を祈ったであろうと思われます。

軍配団扇は室町末期から武将の間で流行した、部下の指揮をするのに使う団扇です。18世紀以降は次第に衰え、相撲の行司にその名残を残すようになりましたが、日野市の指定文化財として八幡神社に残る家康寄進と伝わる軍配団扇を、家康の領国支配という視点から取り上げることで、多摩地域に及んだ徳川家の支配のイメージを容易にすることが考えられます。



神社の多くは村や町の中心地の小高い所に設けられ、社殿を囲む鬱蒼とした木立は、周りの景観とはことなり何か森厳な気持ちに浸らせてくれます。お祭り、相撲大会、七五三、古木、天然記念物など、子どもたちの生活との関わりから神社を観察してみると、郷土の歴史の古さや受け継がれてきている郷土の文化についても知るよい学習の場です。

2. 指導計画

第6学年 社会科 小単元 「全国統一への動き」＜5時間＞

- (1) 戦国の世 ＜1時間＞ (2) ヨーロッパ人の来航＜1時間＞
- (3) 信長、全国統一をめざす＜1時間＞ (4) 秀吉、全国を統一する＜1時間＞
- (5) 江戸に幕府を開く＜1時間 本時＞

3. 本時の展開 「江戸に幕府を開く」＜1時間＞

(1) ね ら い

- ・ 関八州を与えられた家康の領地支配の様子や、全国の大名を従え、江戸幕府を開いていった様子を理解する。
- ・ 平山八幡宮の軍配団扇をとおして平山季重と江戸幕府とのつながりに関心をもつ。

(2) 本時の展開

分節のねらい	学習活動・内容	留意点・資料
江戸に幕府が開かれるまでの経緯を知る。 関東支配から 全国に大きな力を及ぼす	1 軍配団扇のレディネス 2 軍配団扇の説明を聞き、平山八幡宮に家康が奉納した訳を考え、話し合う。 ・ 秀吉から与えられた関八州（1590年頃）の広さ ・ 江戸城を中心とした支配と多摩地域の様子 3 関ヶ原の戦い（1600年）が“天下分け目の戦い”といわれる意味について地図をもとに気づいたことを話し合う。 4 江戸幕府を開く ・ 征夷大將軍（武士の頭・1603年）を朝廷より拝命 5 江戸の町づくり ・ 町割り ・ 大名屋敷 ・ 飲み水の確保 ・ 街道の整理	写真または絵図「軍配団扇」 平山八幡神社に軍配団扇を奉納した家康の関東支配への強い思いを想像させる。 ・ 平山八幡神社は鶴岡八幡宮を季重が勧請した神社 ・ 源氏の系図 ・ 季重の優れた武術 地図「関八州の広さ」と「江戸城の位置」 江戸城のある周囲の土地の様子（荒れ地、入江、葦等）と直轄地となる多摩地域 分布図 「関ヶ原の戦いの東軍西軍」 征夷大將軍について 天皇より認められること 源氏の系図にあること 江戸の治安対策と八王子千人同心についてもふれたい
江戸が政治の中心地となり、大名支配並びに全国支配の形を整えていったことを知る。		

	6 信長、秀吉、家康の関係をまとめる	それぞれの治め方を振り返らせる。
--	--------------------	------------------

<資料>

1. 軍配団扇について

軍配団扇の全長は44センチメートル、幅19センチメートルで、団扇部分の素材は皮で、漆の下地の上に金泥を厚く塗り、表に朱の日の丸（8.6センチメートル）裏に銀の円月（8.3センチメートル）が描かれています。

柄は竹を2枚合わせて黒漆を塗り、上・下と付け根には魚子（ななこ）地に唐草を彫り、徳川家の家紋「三葉葵」を金で施した赤銅の金具を付け、握りの部分は細い籐【とう】で巻いてある。団扇の周囲には唐草の毛彫りをした赤銅の覆輪がかけられています。

400年の間には、軍配は境内で行われた子供相撲の行司が使用したりしたこともあって、柄は折れ、覆輪の金具が半ばはずれ、団扇の漆にも亀裂が入り、何ヶ所も浮いている状態でしたが、その資料価値の高さから「八幡神社社宝（一括3点）」として日野市指定有形文化財となり、この文化財指定を機に軍配団扇は鎧師【よろいし】明珍宗恭【みょうちん・むねゆき】氏により修理復元されました。

（平成7年広報ひの9月1日号より 谷春雄氏）

今は、相撲で軍配団扇が使われていますが、もともとは軍配の配置、進退の日時や方角を占って軍の手配をするのが軍配で、家臣に指示をするときに使った団扇を軍配団扇といいます。

戦国時代以降の武将が用いた指揮用具のことです。

2. 平山季重

武者所平山季重は鎌倉初期の東国武士として、また源氏方として活躍、保元・平治の乱に源義朝に属して奮戦、やがて、義朝の嫡男頼朝のもとに富士川の戦いに活躍、その後は義経の配下となって宇治川の戦いで先人を切り、屋島、壇ノ浦の戦いに出陣、勇名を大いにあげた武将です。

現在、京王線平山城址公園駅南にある「平山ふれあい館」のそばには季重館跡の碑が建立されています。また、北野街道をわたり七生丘陵ののぼり口に古くから建つ「宗印寺」の境内には季重を祀る五輪の塔が、さらに上へ平山城址公園の入り口、かつて平山城の曲輪にあたる平らなところには「季重神社」が祀られ、郷土“平山”の地名は平山季重ゆかりの地から名づけられたといわれます。

3. 徳川家康（1542年～1616年）・征夷大將軍までの歩み

三河岡崎城主松平広忠の長男、幼名武千代、のち元信、元康、家康と改めました。幼いころは、織田秀信、今川義元の人質として過ごしました。はじめは今川義元、義元死後は豊臣秀吉とともに信長と同盟、東海に勢力拡大、信長とともに甲斐の武田氏を滅ぼしました（この頃に徳川と改姓）。

征夷他大將軍として幕府を開くために、徳川氏の系図を改め、系図を源義家に通じるように整備させました（1588年頃よりという説）。系図づくりは戦国時代から近世はじめにかけて、大名や豪族の間で流行していました。単なるなりあがりものではなく、祖先をたずねれば、源氏や平氏を連綿とす

る家系を引き継いでいることを誇示することで、天下や一地域を支配する正当性の根拠を系図において主張するのです。

1590 年小田原北条氏を攻め、秀吉の天下統一後はこれに協力、関八州を与えられ、同年に江戸入府。関ヶ原の戦いを経て 1603 年征夷大將軍となり江戸に幕府を開きました。

4. 鶴岡八幡宮

全国の八幡宮の中では、石清水、宇佐八幡宮とともに代表的な地位にあります。1063 年、源頼義が奥州鎮定におもむいた時に、山城国の石清水八幡宮を鎌倉の鶴岡に勧請したのが起源と伝えられます。源氏の氏神、部門の守護神として崇敬されています。八幡宮を武神とする信仰は鎌倉時代に完成されます。鎌倉時代を通じて毎年、年の初めには将軍自らが参拝しました。鎌倉幕府滅亡後も、室町幕府、江戸幕府等は社領を寄進し、社殿の修造に努めました。

(吉野美智子)

旅行の計画を立てる際、よく時刻表が使われる。詳しく読み解くと、時刻表には鉄道の発着時刻のほかに、駅の施設や、周辺の情報があり旅行案内としても活用することができる。ところが最近では情報通信網の発達にともない、携帯電話で容易に発着時刻や運賃のみならずUUAEA運行状況も即座に入手できるようになり、時刻表の活用方法も変化している。かつて運転本数の多い大都市の電車は始発と終電の数本のみ記載していて、その間に必要とする列車の時刻を省略していた。最近では、大都市の全列車の時刻を掲載した時刻表も発行されるようになった。下の時刻表は中央線快速電車の時刻の一部である。欄外を見ると東日本大震災にともなう節電に協力するための臨時ダイヤであると注意を促している。このことは平成23年の事情を読み解く情報にもなるだろう。

〔56〕 《ご注意》 中央線(快速)(平日)は節電に伴う、「夏の特別ダイヤ」を掲載しています。なお、電力需給の状況により、運転計画は急遽変更となる場合もありますのでご注意ください。

交通新聞社「東京時刻表」平成23年9月号 ©交通新聞社2011

視点1 算数において「速さ」を計算する。

距離と時間が分かれば速さを求めることができる。距離はいちばん左側に「営業キロ」として記載している。時間は発着時刻から計算することができる。厳密には、時間調整や通過列車待ちがない場合は30秒の停車時間を差し引きすることが必要であるが、便宜上、停車時間も移動時間として計算する。また、列車は加速・減速しているため、計算値は平均の速度が算出される。鉄道業界ではこの速度のことを表定速度と呼称している。

中央線（快速）平日において始発電車は日野から豊田までの速さは時速何kmで走行しているかという問題を提示する。計算の過程で四捨五入や、分速から時速への変換が必要であるため、既習の内容を活用することができる。

距離（営業キロ）	$43.1 - 40.8 = 2.3$
時間	$4\text{時}46\text{分} - 4\text{時}43\text{分} = 3\text{分}$
速さ	$2.3 \div 3 = 0.766\cdots$ （分速）
	$0.77 \times 60 = 46.2$ （時速）
	<u>時速 約 42.6km</u>

視点2 大正時代の列車の「速さ」を計算する。

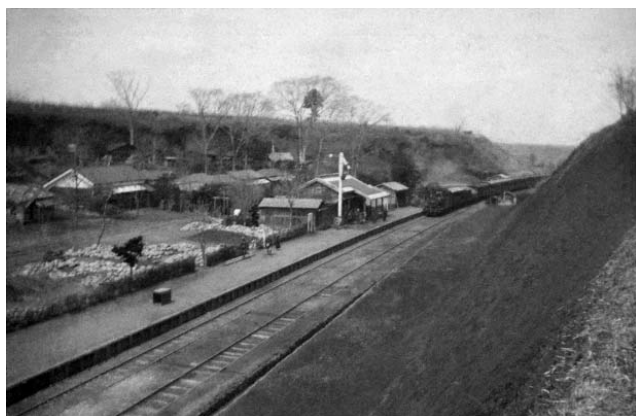
駅名	哩程	大正14年4月の下り列車											
		405	701	431	407	433	409	435	411	437	413	439	441
日野發	23.0	629	812	932	1113	1230	143	319	441	547	654	838	1019
豊田發	24.4	635	818	938	1119	1236	149	326	448	553	700	844	1025

上の表は大正14年4月に日野駅と豊田駅に停車するすべての下り列車の時刻である。ここでも始発列車から当時の列車の速さを計算してみる。ここで留意すべきことは、距離が哩程（マイル）になっていることである。昭和5年4月1日から100マイルを161kmに換算されることになったため、単位の換算もあわせて考慮することが必要である。

距離（マイル）	$24.4 - 23.0 = 1.4$
距離（キロ）	$1.4 \div 100 \times 161 = 2.254$
	≈ 2.3
時間	$6\text{時}35\text{分} - 6\text{時}29\text{分} = 6\text{分}$
速さ	$2.3 \div 6 = 0.383\cdots$ （分速）
	$0.38 \times 60 = 22.8$ （時速）
	<u>時速 約 22.8km</u>

さらに、計算によって求められた数値について吟味するとよい。平成23年の中央線電車は大正14年の列車の約2倍の速さで走っていることが分かる。また、1時間に22.8km走るということは、フルマラソンの世界記録保持者とほぼ同じ速さであることに気付かせると、子供たちには実感がともなってくる。

視点3 日野駅の移転にともなう駅間距離の変更はあったのか。



昭和初年の日野駅



平成 23 年の旧日野駅付近

昭和 12 年に日野駅は移転している。旧日野駅は地形図の旧図を使って調べてみると中央自動車道路のガード下付近にあった。現在の日野駅より約 300m 豊田寄りである。このことにもない、距離の変更があったと予想できる。しかし、大正 14 年を換算した距離と平成 23 年の距離を比較すると違いがないため、駅間距離の変更がなかったと考えられる。すると、時刻表の駅名右側に示している「営業キロ」というのは、実際の距離とは異なることが分かる。このことから、正確な距離を測定するためには地図が必要であることに気付く。



大正 13 年 10 月 30 日発行地形図 立川

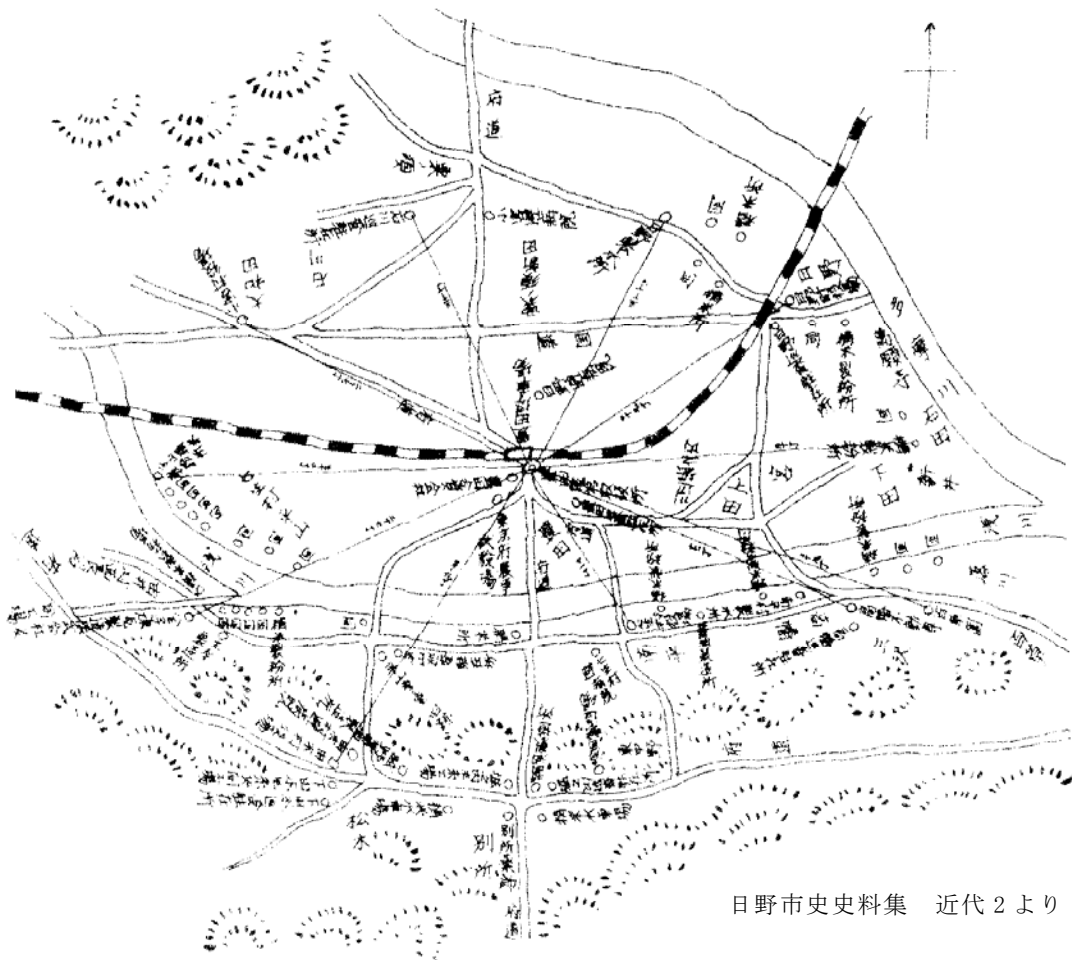


昭和 22 年 4 月 30 日発行地形図 立川

視点4 時刻表から文化を読み取る。

大正 14 年の時間表（時刻表ではない）を見ると、豊田駅の前頭部分に〒マークが記載されている。これは電報を取り扱う駅であることを示している。小学校 3 年生では郵便局の地図記号であると学習するため、この違いについて疑問をもたせることができる。郵便局の地図記号は当時の所管官庁である通信省の「テ」の字をデザイン化したものである。したがって通信にかかわるものにはこの記号が入るため、電報のマークとしても使用された。

次に、情報通信の要である電報の取り扱いを町役場のある日野駅ではなく豊田駅で実施したことに疑問が現れてくる。豊田駅が開業する前に府立農事試験場や煉瓦工場ができたこと、そして精米製粉の水車が 25 台あることから、通信の必要があるため、豊田駅が開業した翌年の明治 35 年に電話を敷設するよう東京郵便電信局長に請願を出している。次頁の図は、主要な場所から豊田駅電信取扱所までの距離を表している。



甲武鉄道豊田停車場（武蔵国南多摩郡日野町大字豊田）

日野市史史料集 近代2より

このほか、時刻表の中には赤帽のいる駅、弁当販売駅、洗面所のある駅などの情報を掲載している。また、広告から当時の旅行の仕方や世の中の状況を推察することができる。

旧版地図の入手方法

国土交通省国土地理院では、旧版地図の謄本を交付している。謄本交付については、国土交通省オンライン申請システムによる申請届出及び情報サービス課と関東地方測量部が受付窓口になっており郵送による受け付けも実施している。「謄本交付申請書」と「交付用別紙」に必要事項を記入の上、手数料相当額の収入印紙と謄本を配送で受領するための郵送料を郵便切手で送付する。現在、刊行している地図は謄本交付の対象になっていないため、注意が必要である。詳しくは国土地理院のWebサイトに掲載している。

<http://www.gsi.go.jp/MAP/HISTORY/koufu.html>

日野市立図書館に所蔵している時刻表復刻版

平成24年3月現在、日野市立図書館において昭和39年10月号、昭和42年10月号、昭和43年10月号、昭和44年5月号、昭和47年3月号の時刻表復刻版を所蔵している。

尚、戦前・戦中・戦後の時刻表復刻版については国立国会図書館に所蔵している。

本稿において使用した地図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図(立川)を使用したものである。

(秋田克己)

(3) 教材化できる日野の昔話 再話例

はたかけの松

高幡不動尊に入るとすぐ、大きな松の木があります。この松の木のことを、「はたかけの松」といいます。その由来について、高幡不動尊では、昔、源頼義が奥州征伐のさいに、必勝祈願のために立ち寄って源氏の旗をかけた松だと伝えています。

ところが、もう一つのはたかけ物語があるのです。昔むかし、お百姓さんの娘がはたを織っていました。はたというのは、機織りのはたもののことです。ある日のこと、「立派なはたが織れますように。」と、高幡不動尊にお参りをし、願をかけました。その結果、見たこともないほど美しい織物ができ上がり、その娘は村一番の機織りの腕だと評判になりました。そして、忙しい毎日を過ごすようになりました。ある日、いつものように機を織っていると、さっと織りかけの布が舞い上がって行きました。舞い上がった布は、ぐんぐんと空高くに舞って、ついには高幡不動の松の木の枝に引っかかってしまいました。その時、娘は以前願掛けをしたお札がなくなっていることに気づきました。そして、あわててお礼参りをしたところ、松の木に引っかかっていた布は娘の手にひらひらと戻ってきました。それで、この松の木をはたかけの松だと、村に住む人は伝えています。

百草園の子育地蔵

梅の名所として有名な百草園は、江戸時代の松連寺として禅寺の跡地です。江戸時代の末期には將軍ゆかりの尼寺として栄えていました。今、現在も残っている茶店の藁葺き屋根の一部には、その名残を残しています。日本庭園も凝っていて、心字池を中心に枝の美しい松や、梅、柳その他の木が、今もなお美しい影を池水に映しています。また、池には、黒や灰色の鯉が泳いでいます。

この百草園の中庭には、子育地蔵が立っていて、昔、交通事故で亡くなった女の子の物語が伝えられています。

江戸時代、まだ百草園が尼寺だったときのお話です。尼寺の女中のウメが、いつのまにか庭師の善吉と愛しあう中となり、二人の間にはいつしかかわいい女の子が生まれ、トキと名付けられました。しかし、愛し合う二人にはある問題がありました。働き者のウメと比べて、夫の善吉は怠け者で、暮らしに困ったウメはトキをつれて故郷の新潟に帰ってしまいました。しかし、食べ物を買うお金もないウメは、一生懸命働きすぎて、ついには過労死してしまいました。

ウメが死んでしまったことを知った、善吉は、自分がなんてひどい男だったのかと気づき、ついには心を入れ替え、子どものトキを絶対に幸せにするぞと決心し、ついには庭師として働き始めました。しかし、順風満帆にはいきません。トキが4歳になったある日のこと、道端で遊んでいたトキに、恐ろしい速度で走ってきた暴れ馬が、あっというまにトキを踏みつぶしてしまったのです。

一生懸命愛したわが子をなくした善吉は、ひどく悲しみ、百草の尼さんにどうしたらこの悲しみをなくせると訴えました。尼さんは、「いくら嘆いても死んだものは帰りません。それよりも、お地蔵様を掘ってお祀りしなさい。それが何よりの供養となりましょう。」と、言って善吉を慰めました。そこで、善吉は心をこめてお地蔵様を刻んだのが、この百草の子育て地蔵なのです。

このお地蔵様は、明治のはじめ、一度は土の中に埋められてしまうということがありましたが、今の京王電鉄がこの土地を買収したときに、土中から掘り出したものです。

駒形神社に祭られた駒

昔むかし、国府が府中にあったころのお話です。その村では、毎年一度国府の庭で近隣の名馬の競走が行なわれていました。近くの村々から名馬が選ばれ、飼主に引かれて府中へ向かう馬たちは、ハレの日のために色艶はよく、手入れもゆき届いていました。

日野の堀の内村からも1頭の馬が連れられていきました。今でも、堀の内は北に小高い段丘があり、段丘の上は広々とした原がひらけています。昔はここに多くの馬が放し飼いになっていたのでしょう。ある時その中から1頭の馬が選ばれました。毛並みもよく、足も長く、いかにもたくましい馬でした。

府中での競馬に参加した堀の内の馬は、先頭を走りつづけ、そのまま柵を乗り越えると一目散に堀の内めざして駆け続けたといひます。府中から日野まで駆けつづけた馬は、やがて飼い主の家に走りついたとたんに力尽きて、そのままばったり動かなくなったそうです。それを見た村人たちはあわれんで、この馬を祀り、駒形神社と名づけました。

今でも、小高い丘の中腹には駒形神社があります。そして、府中の大國魂神社の祭礼の時、この駒形神社の名を読み上げています。

神明様のお告げ

日野市栄町に東光寺の神明社があります。この神社は古いお宮で、作られた時代は分かりませんが、戦前はこのお宮に大人が3人いても抱えきれないほど、太く大きな杉やケヤキが生い茂っていました。そこは昼間でも薄暗く、まさに古い歴史のある神社といった姿でした。戦後、日野一小の新築の際には、三百本近い杉の木を採って建材にし、今ではその森は見る影もないほど、小さくなってしまったそうです。

昔、東光寺村と、その西の栗の須村（現在は八王子市石川）との間に、地境の争いがおきました。この村々は、多摩川と谷地川の近くに住んでいたため、洪水のたびに地境が分からなくなってしまったからでした。

村人たちはいつまでも争っていても仕方が無いというので、神明様のお告げをきくことにしました。あくる日、お告げは、「暁の一番鳥が鳴いた時、両方の馬を走らせて、勝った方の村の言い分を村境にするがよい。」という内容でした。どちらの村もその日の備えて色々と工夫をこらし、自分の方の馬が勝つことを願いました。栗の須の人々は、一番立派な馬を選び、たっぷりと食べさせて一番鳥を待ちました。ところが東光寺では、馬を空腹にさせておいて、食料のありかを先に教えておけば食べたい一心で速く走ると考えました。やがて一番鳥が鳴き、二匹の馬は駆け始めました。お腹いっぱい食べた栗の須の馬の勢いがよいのに比べて、日野の馬は空腹に耐えかねて倒れこんでしまいました。

そのため、日野は用水の取り入れ口も、お茶屋の松も、元は日野のものであったのに、栗の須へとられてしまいました。

神明様は日野の神社ではありましたが、空腹の馬に力をつけることはできなかったのです。日野の村（東光寺村）の人々はあまりに考えすぎて失敗してしまったことを残念に思いましたが、過ぎたるは及ばざるがごとしであることを今でも語り継いでいます。

おしゃもじさま（石神）

日野市宮の別府神社の北西の鬼門にあたる位置にある田んぼの中に、「おしゃもじさま」とよばれる古い小さな祠があります。これは百日咳や麻疹、安産、子育ての神社で、ご神体は高さ30cm位のずんぐりした石神です。戦前は、このおしゃもじさまに、新しいおしゃもじや古いおしゃもじが沢山添えられていました。

これは、百日咳や麻疹にかかった子どもたちの病気を癒やすために願掛けした人たちのお供え物でした。願掛けをする人は咳止め祈願にはおしゃもじさまにお詣りをします。その時、一本おしゃもじさまから借り受けて持ち帰ります。その後、百日咳が止まったときに、お礼としておしゃもじを二本ずつお返しするならわしでした。私も戦時中、二人の子が百日咳にかかり、良い薬がない時代でしたので、ただただおしゃもじさまにおすがりしていやしていただきました。お礼参りには、二人の子を連れて、4本のおしゃもじをお供えしました。おしゃもじさまは、おしゃぐじさまともいい、漢字では、左口神、社護神、社宮司、遮軍神などと書き、三狐大明神ともいい、石神ともいいます。また、大昔には、村境の神様として祀られていたともいわれています。日野では、宮の石神が唯一の村境の神様です。この石神も今では、田の隅に追いやられてしまいましたが、今でも四月一八日には、ささやかなお祭りをしています。

（瀬川 敦）

3. 関係機関との連携・協力の広がり・深まり

(1) 郷土教育推進に向けた体制づくり

① 日野市の郷土学習施設とこれまでの取り組み

郷土教育を支援する日野市の施設・部署としては、郷土資料館、図書館、生涯学習課文化財係、新選組のふるさと歴史館などがある（本稿では以下これらを便宜的に“郷土学習施設”と呼ぶことにする）。

これら郷土学習施設は、これまでもそれぞれが蓄積した資料・情報を、様々な形で郷土教育に活かしてきた。郷土資料館と生涯学習課文化財係は、学校の見学への対応のほか、出張講座、出張授業（出前いっちょう）、民俗資料をはじめとする郷土資料の貸出などを行ってきた。新選組のふるさと歴史館は新選組、幕末維新、甲州道中日野宿を活動テーマとする観光施設として位置付けられているが、学校の見学、調べ学習などに対応してきた。また昭和40年から活動を開始した日野市の図書館は、図書をはじめとする資料の閲覧・貸し出しや、レファレンスなどで郷土教育を支え、その活動は別項で紹介されている通りである。

② 郷土学習施設を支える市民の力

市民ボランティア 郷土学習施設の活動は、その職員だけでなく多くの市民の協力により支えられている。郷土資料館においては、テーマに応じて様々な市民ボランティア組織があり、真慈悲寺調査ボランティア、日野市のあゆみ50年を調査する会、勝五郎生まれ変わり物語探究調査団、七生丘陵調査団などの活動の成果は、同館の展示や講座、体験学習などに活かされてきた。図書館においても、日野宿発見隊や日野写真散歩などの活動が市民との協力のもとに行われ、その成果はしばしばマスコミなどにも取り上げられている。さらに新選組のふるさと歴史館でも、市民によるガイドボランティアが館の業務を支えている。



真慈悲寺調査ボランティアによる発掘調査

市民団体 行政の働きかけにより組織された以上のような団体のほかに、日野市では市民の自発的な研究団体も数多く活動している。郷土教育に関連した団体だけでも、日野の古文書を読む会、日野の昭和史を綴る会、石仏の会、日野の自然を守る会などがある。これらの団体には歴史が古いものも多く、郷土資料館や図書館などと連携して活動を続け、その成果は報告書などにまとめられているほか、日野市内外の講演会や学習会などにそのメンバーが講師として登壇する機会も少なくない。

また、こうした団体だけではなく、個々の市民や企業なども、郷土学習施設の資料・情報の集積に大きな役割を果たしていることは言うまでもない。

郷土学習施設は多くの人材をその内外に抱えている。このような市民の力を、郷土教育の実践に活かさない手はない。

③ 行政内部の連携

郷土教育の推進には、歴史館、文化財係、図書館といった郷土学習施設相互の連携や、情報の共有化が大切である。しかし子供たちの郷土の理解に必要な情報は、それら郷土学習施設のみに集約されているわけではない。日野市の行政は、市民の暮らしにかかわる様々な業務を行っている。郷土教育の推進には、それら行政部署との連携・協力も、当然のことながら必要になる。例えば農・工・商といった産業にかかわる分野では、産業振興課の持つ情報は欠かせないし、身近な道や公園、水路、緑地を題材にする場合には、道路課や緑と清流課などの協力があれば効果的である。

それぞれの部署は、独自の情報や、人材のネットワークを持っている。それらを郷土教育に活かすためにも、郷土学習施設はアンテナを高くして、市政の動向と市が行う業務を的確に把握しておく必要がある。

④ 七生丘陵を題材とした郷土学習

郷土教育と市民、企業、行政とのかかわりについて、本報告書に載せられた実践事例とも関連する点が多い七生丘陵を例に見てみたい。

七生丘陵のあゆみ 七生丘陵は、明治時代以前は燃料、肥料などの供給地だったが、大正 14 年(1925)に玉南鉄道（現在の京王線府中～京王八王子間）が開通すると、その姿に変化があらわれる。

高幡不動尊や百草園といった古刹や名勝が点在する七生村において、京王電軌（玉南鉄道を大正 15 年に吸収合併。現京王電鉄）は村と協力して観光開発につとめた。その結果、高幡不動尊に門前町が形成され、参道には料理店やカフェなどが建ち並んだ。七生丘陵には「野猿峠越えコース」や「南多摩聖蹟回りコース」といったハイキングコースが整備されたほか、平山ゴルフ場（大正 14 年開場）や、鮫陵源（昭和 11 年に開園した養魚場と遊園地を複合した施設）も開園した。

丘陵が迫り耕地が限られている七生村では、戦時中に満洲への分村も計画されていたが、敗戦でその道が断たれると、農業改善や生活改善に取り組むとともに、観光開発に一層の力を注ぎ「観光立村」を目指した。高幡不動尊から長沼・北野に至る「野猿峠ハイキングコース」は京王沿線を代表する行楽地として週末には新宿からハイキング特急も運転された。また七生村と京王帝都電鉄（現京王電鉄）の誘致により多摩動物公園が昭和 33 年に開園したほか、多摩テックも昭和 36 年に程久保に開園した。京王帝都電鉄が平山ゴルフ場跡を利用して平山城跡公園を開園させ、百草園を買収したのもこの頃のことであった。

しかし昭和 40 年代から、七生丘陵は東京のスプロール現象の波に吞まれ、ハイキングコースの沿道での宅地開発がはじまり、以降の七生丘陵は緑豊かな住宅地となって今日に至っている。

関係機関との連携 以上のような七生丘陵は、様々な郷土学習の題材を備えている。薪や肥料の供給地から行楽地、住宅地へといった土地利用の変化は、地域の成り立ちを知るうえで欠かせない題材であろう。京王線や動物園などは、その入り口として子供たちの興味を惹きやすいのではなかろうか。また小字名や公園の名称などを手掛かりに往時の自然環境を再現することもできよう。もちろんこれらより古い時代の事物として、高幡不動尊や真慈悲寺なども地域を理解する



開通時の玉南鉄道（開通記念絵はがきより）日野市郷土資料館所蔵

手掛かりとなる。

しかし、郷土学習施設はこれらの題材に関する資料や情報を有しているものの、子供たちの興味や疑問のすべてに応えられるわけではない。学習に広がりや深みを持たせるには、市民や、関連する行政部署、企業などが持つ情報、資料、人材が有効になってくる。

例えば市民や企業等が持つ情報や資料としては、

- ・京王線について：京王資料館、京王電鉄、など
- ・七生丘陵の自然について：日野の自然を守る会、七生丘陵調査団、など
- ・七生地区の地名と歴史について：日野の昭和史を綴る会、など
- ・七生地区の古文書・絵図などについて：日野の古文書を読む会、など
- ・七生地区の農業について：J A東京みなみ、など

などが考えられよう。もちろんこのほかにも資料や情報をお持ちの企業や市民は数多く存在する。

また日野市の各部署においても、郷土学習施設はもとより、例えば七生丘陵の自然や公園については緑と清流課や環境情報センターが、七生丘陵の観光や農業については産業振興課などが、郷土の理解に必要な資料や情報、人材を有している可能性がある。七生丘陵の開発過程や丘陵の将来像を探るうえでも、行政の情報は有効である。

郷土教育における学校と市民、特に学区域の市民との直接的な連携は、これまでも数多くの成果を生み出してきた。その連携をさらに日野市全体へと広げ、市民や企業、行政が持つ様々な資料、情報を活かすことが、郷土教育に広がりや深みを与える鍵となろう。

膨大な選択肢の中から子供たちの学習に必要な資料や情報を取捨選択するのは骨の折れる作業であるが、それを支援するのが郷土学習施設である。郷土学習施設においては、そうした資料や情報を集約しつつ、学校と市民・企業・行政の円滑な連携を支援することを、今後求められる役割の一つとして自覚しなければならないであろう。

⑤ これからの郷土教育推進に向けて

郷土資料館、歴史館、生涯学習課文化財係、図書館といった郷土学習施設は、これまでもその特性に応じて郷土教育のお手伝いをしてきた。しかしこれからは郷土学習施設のみならず、日野市全体が“よってたかって”子供たちの郷土学習を支援する仕組みを作り上げて行くことが求められる。

郷土教育の目的は、郷土を理解し、郷土を愛する心を育むことにあるとされるが、それは即ち郷土の理解を通して日本や世界全体を見通す眼を育てることであり、大きな意義がある。より広く、より深く郷土を理解するための体制の構築は、そのような眼を養ううえで、是非とも取り組まなければならない課題であり、その中で郷土学習施設が果たすべき役割は決して小さくはないと言えよう。

(金野啓史)

（２）日野市立図書館のあゆみ 50 年と図書館・郷土教育との連携

1. 日野市立図書館のあゆみ

日野市の図書館は、日野の出身で当時日本図書館協会事務局長だった有山崧氏らの構想を実現すべく初代館長に前川恒雄氏を迎え、昭和 40 年 9 月に 1 台の移動図書館車によりサービスを開始しました。当時の公共図書館は、建物は市のステータスシンボルとして 1 つあればよく、ほとんどが閉架式の館内閲覧中心の方式で、実態は学生の勉強部屋という考え方が主流でした。その時代に、日野市の図書館は

- ① 市民の要求する資料を提供する（個人貸出を重視する）
- ② 市内全域へのサービス・すべての市民へのサービス
- ③ 新鮮な図書を豊富にそろえる



初代ひまわり号（1965～1971）

の 3 点を運営方針に掲げ、市民の暮らしに役立つ図書館を目指しました。

移動図書館から図書館活動を始めたのにはいくつか理由がありました。建物を作る費用を図書費にまわすことができ、機動力を生かして本を求めている市民の家のすぐ近くまで行くことができるからです。また、市内を移動図書館車が回ることによって図書館の PR にもなり、将来の利用者になる子どもたちにもスムーズに受け入れられると考えたからです。移動図書館は市民の圧倒的な支持を得て、翌昭和 41 年からは 2 台の移動図書館で活動を行いました。2 代目のひまわり号の側面には「誰でも無料で本が借りられます」と書かれていました。こうして、図書館は気軽に使えるというイメージが定着し、当時としては画期的な貸出の実績をあげ、人口一人当たりの貸出冊数で日本の公共図書館のトップになり、全国の市町村の図書館のモデルとなりました。



電車図書館（1966～1971）「動かない図書館を」との市民の声に応え、昭和 40 年代には小さな分館が次々と開館しました。昭和 41 年には廃車となった都電の車両を利用して多摩平児童図書館が開館しました。この図書館は電車図書館と呼ばれ、子どもたちを中心にたくさんの利用がありました。電車図書館は昭和 51 年にもう少し大きい建物のこども図書館となり、平成 14 年まで今の多摩平の森ふれあい館のある場所でサービスを行っていました。

昭和 48 年 4 月には、豊田に中央図書館が開館しました。開館式の写真を見ると大勢の人がこの図書館を楽しみにしていた気持ちが伝わってきます。このようにして、当初目指した市内全域の図書館網は一応完成されました。

昭和 52 年に市役所の新庁舎が完成し、その 1 階に市政図書室が開設されました。ここでは、日野市の行政・歴史をはじめとする郷土資料を網羅的に収集しています。日野市に関する新聞記事の収集も大事な業務です。



中央図書館開館式（1973.4）

中央図書館の完成後、自分の地域にも大きな図書館がほしいという要望が増え、それに応じて昭和 55 年に高幡図書館が移転新築し、日野図書館も移転改装して新たに開館しました。

平成 2 年の百草図書館の開館以降、新しい分館は作られていませんが、平成 16 年に多摩平の森ふれあい館に多摩平図書館、平山季重ふれあい館に平山図書館をリニューアル開館しました。

現在は、中央図書館のほか、高幡・日野・多摩平・平山・百草・市政図書室の 6 つの分館とひまわり号 1 台で運営しています。

2. 図書館・郷土教育の連携

① レファレンスサービスとは

耳慣れない言葉だと思いますが、一言で言うと「調べ物のお手伝いをする」ことで、図書館の重要なサービスの一つです。直接「答え」を提供するのではなく、答えを導くのに必要な「資料や情報」を的確に案内・提供することです。

平成 20 年に策定された日野市の図書館基本計画にも謳われていますが、日野市立図書館は「日野市の地域資料・行政資料を収集・保存・提供し、日野市の歴史を未来に伝え」ることを任務の一つにしています。日野市についての資料は日野市の図書館が責任を持って収集し、保存・提供していくということです。



学校の先生が日野市の郷土教育を実践するときに必要な資料は、図書館のレファレンスサービスを利用し、図書館員に相談して探すのが一番効率的だと思います。図書館には、日野市の地域・郷土資料に詳しい職員がいます。また、図書館ではわからないことでも、郷土資料館や生涯学習課の学芸員など適切な他の機関をご紹介します。学校の先生方には図書館のレファレンスサービスの利用をぜひお勧めします。

② 第 2 次日野市子ども読書活動推進計画

平成 23 年 3 月に策定された第 2 次日野市子ども読書活動推進計画に基づき、図書館では子どもの読書活動を推進するために学校との連携に努めています。図書館から学校へのサービスの例については、郷土教育推進研究報告書『「郷土日野」指導事例 第 6 集（平成 22 年度）』p 68-69 にもありますが、授業で使用する図書をお届けする学校搬送便の利用も増えてきています。

また、この第 2 次計画では、これまで不十分だった子ども向け地域・郷土資料の作成を課題の一つにしています。子ども向けの郷土資料を作ることで、子どもたちが自分たちの住む地域をより一層理解できるように、また、学校での郷土教育への一助となるようにと考えています。「こんなテーマで地域についての学習をしたい」「こんなテーマの子ども向け資料があればよいのに…」といった学校からのご意見・ご要望をお寄せいただき、より役立つ郷土資料を作成したいと思っています。

引用・参考文献

『くらしの中に図書館を ―市民に役立ち、共に歩む図書館― 図書館基本計画』

日野市立図書館 平成 20 年

『「郷土日野」指導事例 第 6 集』 日野市立教育センター 平成 23 年

『第 2 次日野市子ども読書活動推進計画』 日野市 平成 23 年

『日野市立図書館サービス実績 昭和 40 年度～平成 22 年度』 日野市 平成 23 年

(星 まゆみ)

日野市立図書館のあゆみ (主に、学校・郷土資料関係の事項を中心に)

- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・1965(昭和 40)年 <ul style="list-style-type: none"> 6 月 「日野市立図書館設置条例」公布 7 月 市立集会場小会議室に事務所をおく
前川恒雄、初代図書館長に就任 9 月 事務所を七生支所内に移す
移動図書館によるサービス開始
(37 か所の駐車場) ・1966(昭和 41)年 <ul style="list-style-type: none"> 6 月 高幡図書館開館 8 月 多摩平児童図書館(電車図書館)開館 9 月 移動図書館2号車サービス開始
(55 か所の駐車場) 10 月 事務所を多摩平支所内に移す ・1967(昭和 42)年 <ul style="list-style-type: none"> 7 月 福祉センター図書館開館 ・1969(昭和 44)年 <ul style="list-style-type: none"> 7 月 社会教育センター図書館開館 ・1971(昭和 46)年 <ul style="list-style-type: none"> 4 月 平山児童図書館開館
多摩平児童図書館新館開館 ・1972(昭和 47)年 <ul style="list-style-type: none"> 4 月 百草台児童図書館開館 ・1973(昭和 48)年 <ul style="list-style-type: none"> 4 月 中央図書館開館 ・1977(昭和 52)年 <ul style="list-style-type: none"> 4 月 平山図書館開館(旧平山児童図書館) 12 月 市政図書室開館 ・1978(昭和 53)年 <ul style="list-style-type: none"> 10 月 平山図書館増築 ・1979(昭和 54)年 <ul style="list-style-type: none"> 12 月 『日野郷土かるた』刊行 ・1980(昭和 55)年 <ul style="list-style-type: none"> 5 月 高幡図書館新館開館
日野図書館開館(旧福祉センター図書館)
の移転 ・1985(昭和 60)年 <ul style="list-style-type: none"> 4 月 『おはなしかるた』刊行 5 月 小学校新1年生への図書館ガイダンス開始 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 1989(平成元)年 <ul style="list-style-type: none"> 5 月 『おはなしかるた』改訂版作成 ・ 1990(平成 2)年 <ul style="list-style-type: none"> 11 月 百草図書館開館 ・ 1992(平成 4)年 <ul style="list-style-type: none"> 3 月 『ひのふるさと歳時記』刊行 ・ 1996(平成 8)年 <ul style="list-style-type: none"> 5 月 『おはなしすごろく』刊行 ・ 1997(平成 9)年 <ul style="list-style-type: none"> 3 月 ひまわり号による小学校への
団体貸出を終了 ・ 2000(平成 12)年 <ul style="list-style-type: none"> 2 月 多摩平図書館開館
(社会教育センター図書館の
移転・名称変更) ・ 2001(平成 13)年 <ul style="list-style-type: none"> 4 月 『おはなしめいろ』刊行 ・ 2002(平成 14)年 <ul style="list-style-type: none"> 5 月 多摩平児童図書館閉館 ・ 2003(平成 15)年 <ul style="list-style-type: none"> 4 月 小学校を訪問して行う図書館ガイ
ダンスを、1年生から3年生に変更 ・ 2004(平成 16)年 <ul style="list-style-type: none"> 4 月 多摩平図書館新館開館(多摩平図書館
と多摩平児童図書館の統合) ・ 2006(平成 18)年 <ul style="list-style-type: none"> 2 月 日野市子ども読書活動推進計画
『すべてのひのっこを本好きに』策定 5 月 学校への資料搬送便開始 ・ 2008(平成 20)年 <ul style="list-style-type: none"> 4 月 平山図書館新館開館 8 月 日野市立図書館基本計画策定 ・ 2009(平成 21)年 <ul style="list-style-type: none"> 6 月 百草台児童図書館閉館 ・ 2011(平成 23)年 <ul style="list-style-type: none"> 3 月 第2次日野市子ども読書活動推進
計画策定 |
|--|--|

(星 まゆみ)

4. 郷土教育推進のための普及・啓発

(1) 郷土教育を実践する指導者の育成

① フィールドワーク

郷土教育を推進するためには、指導者自身が地域の歴史や自然、文化、人材などに直接触れ、知識だけではなく、実感を通して地域への愛着や誇りをもつ必要がある。その上で、具体的な地域素材の教材化を図り、それを指導することによって子どもたちの興味・関心が高まる。指導者自身が「このことを伝えたい」「気づかせたい」と、郷土への愛着と誇りをもって指導に当たることで、「ふるさと日野」に自信と誇りをもった「ひのっ子」を育成することができる。

そこで、郷土日野の自然、歴史、文化、産業など郷土のよさや特色について、より深く・より広く知り、具体的な実践が図れる指導者の育成を目指して、例年夏季休業日にフィールドワークを実施している。これは、日野市教育委員会と郷土教育推進委員会の共同事業として、本委員会のメンバーが講師となっていて行っている。今年度は「高幡地区」を取り上げ、高幡不動尊の文化や歴史と潤徳小学校、高幡用水を中心にフィールドワークを実施した。そして、このフィールドワークを通して地域素材をどのように教材化するか、それをどのように提示し実践するかを考えた。



高幡不動の門前

京王線高幡不動駅の駅前広場から続く高幡不動尊の参道は、現在は商店街となり、駅前からは周辺の団地などに多くのバスが発着している。また、京王線に多摩都市モノレールが接続し、交通の要所となっている。しかし、明治時代の初めは門前には、茶屋などが数軒あるだけで、田んぼが一面に広がっていた。



玉南電気鉄道記念之碑

明治中期以降、高幡不動や百草園に来るには甲武鉄道（今の JR 中央線）に乗り、日野駅を利用した。その後、大正 5（1916）年 10 月京王電気軌道が新宿―府中間に開通した。八王子まで開通させる計画であったが、経営不振で延長できなかった。そこで、地元有志も加わって玉南電気鉄道を設立し、大正 14（1925）年 3 月府中から京王八王子間が開通した。しかし、政府からの補助金が打ち切られ、大正 15 年 12 月、わずか 1 年 9 カ月で京王電気軌道に吸収合併されてしまう。



高幡不動の石造物

新選組副長の土方歳三は市内の石田で生まれ、明治2年5月の函館戦争で戦死した。命日に近い日曜日に新選組祭りが行われる。境内には土方歳三の像や新選組記念碑がある。この他、芭蕉の句碑などの文学碑、上杉憲頭の墓（茶湯石）、文永の板碑、四国八十八か所の石仏など、石造物が多い。



高幡不動堂

高幡山金剛寺は平安時代に作られ、関東の三大不動の1つで真言宗の別格本山になっている。当初は、仁王門に続いて大日堂があったが、建武2(1335)年8月4日夜の大風で山の中にあった不動堂が倒壊し、その中間に移築された。元に戻す予定であったが、そのまま現在に至っている。



山内経之の手紙（胎内文書）

その頃、日野本郷を治めていたのが山内経之で、戦場から日野へ送った手紙が、不動明王の胎内文書として残された。彼は、領地を維持するためやむなく戦に参加した。しかし、自分が死んだら子どもが小さいので、残された家族のことが心配だなど、当時の武士のありのままの姿や合戦の実態を生々しく伝えている。

(写真は『日野市史史料集』)



高幡城

戦乱の世の中に対応して、高幡不動の裏山には城館が設けられた。市内でも規模が大きく、低地に突き出した尾根を削って連続した郭をつくっている。堀切が途中にあり、本丸からはスカイツリーが見えるほど展望がよいので、見張り所が設けられたようだ。なお、南西の墓地になっている所も、かつては城館の一部で、水を確保したり、緊急時に大勢の兵隊を集めたりできるようになっていた。

(図は『日野の中世城館を探る』)



松根油採取跡

愛宕山々頂近くの松には、戦時中に松根油を採取した跡が残っている。これは、石油などの代用品として使用を試みたもので、潤徳小学校の子どもも勤労奉仕として、かり出された。また、三沢には地下壕も総延長 3,150m掘られた。今の戦争と昔の戦争を比べ、平和を願う教材作成の可能な場所になっている。



高幡不動の文化財

高幡不動には不動明王・二童子を初め建物や絵画、板碑など国や都の文化財などが数多くある。また、新選組や三沢十騎衆関係の文書もあり、歴史の宝庫になっている。さらに、節分や七五三、だるま市などの年中行事も多く伝わり、中学年の社会科に活用できる。



高幡不動の伝説など

不動堂の前に、願が適ったにもかかわらず奉納するのを忘れた人の機（はた）が飛んできたというハタ掛けの松がある。また、奥の墓地には、小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）によって世界に紹介された「生まれ変わり物語」で有名な藤蔵（とうぞう）の墓がある。さらに、鳴り竜やお鼻井などもあり、昔話や伝説の宝庫になっている。



藤治（とうじ）権現

駅の近くには文政 2（1819）年義民として非業の死を遂げた若者を奉る藤治権現がある。彼は、高幡村の旧家の二男で正義感が強く、村の貧しいものをかばって村役人に遠慮なくものを言うことから疎まれ、計られて牢送りになる。しかし、無罪が明らかになり、放免される日に仕返しを恐れた者たちによって毒殺された。冥福を祈って、天保 8（1837）年この社が建てられた。



別旅（わかたび）

旅の僧が不動明王像だけで脇侍がないのはさびしいと二童子を作った。その僧が旅立ちの日、村人に送られて若宮神社付近に来ると忽然と消えたという別旅伝説などもある。郷土教育では、昔話の指導事例が報告されているが、今回さらに幅を広げることができた。



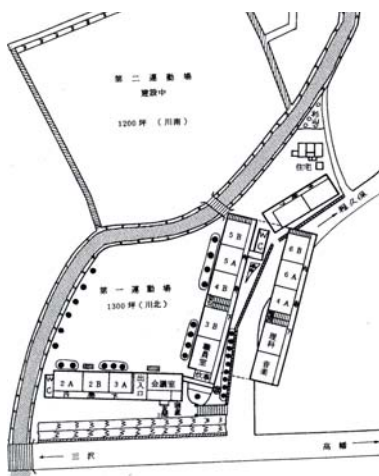
医王寺と潤徳小学校

潤徳小学校は、明治 6（1709）年医王寺の寺子屋としてスタートし町の発展とともに、名主の屋敷、JA 東京みなみ七生支店、さらに現在の場所へ移転した。医王寺は現在のガソリンスタンド付近にあったが、



後に廃寺。今は近くの道路沿いに宝永 6（1709）年の笠付きの立派な庚申塔などが残っている。

（図は『潤徳百年のあゆみ』）



潤徳橋

JA 東京みなみ七生支店の近くの程久保川には、校舎と運動場を結ぶために造られた潤徳橋がある。戦後、児童数が増え対岸に第二運動場を造成し、そこへの移動に使用した。第二運動場は、現在は七生公会堂になっている。

程久保川には上郷橋や後畠橋、寺が背戸橋などがあり、橋の名前の由来を調べることによって、昔の町の様子やその変化など、地域の歴史を学ぶことができる。

（図は『潤徳百年のあゆみ』）



森久保作蔵の水車

高幡不動駅近くのコンビニは、かつては自由民権運動で活躍した森久保作蔵の水車があった。明治 15 年作蔵は、落川村五十子敬斉や三沢村土方啓次郎とともに自由党に入り、明治 21 年県会議員、明治 29 年衆議院議員になっている。水車は明治 34 年滝瀬和蔵に譲渡されるが、この時搗き臼 14 個、挽き臼 1 個があり、水輪の直径は 4m24 cmであった。



高幡用水

作蔵の水車を回した高幡用水は、かつては高幡橋下の堰で浅川の水を取り入れていたが、今では南平用水の流末を使っている。鍋や釜、茶碗などを洗う生活用水や田用水として、高幡、三沢、落川、百草で使われた。現在は一度程久保川に落とし、同じ水量を三沢中学付近でポンプ・アップして下流に流している。



向島用水

以前は、高幡橋付近から取水していたが、川底が下がったり、堤防が作られたりして、昭和17年現在の場所に移転した。10年前は組合員22人で、田は5haあった。4月1日～9月30日まで用水組合が管理し、堀浚いは青年団が行った。現在はさらに川底が下がり、導水路を作っている。



向島用水の水車

平成7年国土庁から用水保全の努力が認められ、日野市は「水の郷（さと）」指定を受けた。その1つのポイントが潤徳小のトンボ池の整備、水車小屋の復元など用水路を活用した新しい学習の場づくりになる。この水車は伝統的な技術は使われていないが、市内に50台以上の水車があったのを記念して作られた。



トンボ池

潤徳小では、学校の北側を流れている向島用水のコンクリート護岸をはずして校内に引き込み、トンボ池を造った。これを利用して環境教育を実践し、平成12年には全国ビオトープコンクール優秀校になっている。

② 研修会



午後の研修は、潤徳小学校のパソコン室で、フィールドワークを行った高幡地区の理解をさらに深めるとともに、地域教材の授業での活用方法を学ぶ講義・演習を実施した。その内容は、次の通りになる。

- ・フィールドワークのまとめ
- ・潤徳国民学校の思い出
- ・実践事例発表

日野の果物「梨園見学会」

多摩平団地と多摩平の昔

仲田の森と蚕糸試験場

- ・新聞記事で見る日野市の歩み 50 年
- ・日野市立図書館の歩み 50 年と図書館・学校との連携

- ・地形図を活用した教材化演習

各項については報告が掲載されているので、詳しくは担当頁を参照して頂きたいが、実践事例発表は、昨年度郷土教育推進研究委員会で作成したものになる。

次に、参加者の感想をいくつか取り上げる。午前中のフィールドワークでは「日頃見慣れた土地の歴史に興味をもって参加することができた。何気なく過ごしがちだが、地名や橋の名前を見ていくと、その意味や歴史が分かることが多くある」など、実際に歩いて見ることによって、地域のよさや歴史などに気づくことができたという感想が多かった。また、午後は「フィールドワークを振り返る映像や説明、郷土教材の実践を知る」ことができたなど、郷土教育に関する取り組みを理解したり、実践事例の報告に刺激を受けたりしたようだ。そして「もっと日野のことを知りたいと思った」「資料もたくさんいただけたので、夏休み中に見たい」など、さらに自分でも学び、広げたいという感想があった。「教材化の視点を知る機会になった」という感想もあるので、参加者が新たに教材を開発し所属校で試みた実践事例なども郷土教育推進研究委員会にご提出いただくよう、今後は呼びかけていきたい。



なお、今回のフィールドワークに当たっては、たましん地域文化財団からは『多摩のあゆみ』の提供があったり、高幡不動尊では奥殿の宝物館や「鳴り竜」にご招待していただいたりした。

・フィールドワークのまとめ

今回のフィールドワークのテーマは大きく高幡不動と潤徳小学校の変遷、高幡地区の用水の3つになる。それぞれのテーマについて補足やまとめを行い、地域素材の教材化についての提案をした。ここでは、教材化への視点のみを取り上げる。これらを参照して教材を作成し、活用を試みて頂きたい。

◎昔話や伝説

高幡不動などではハタ掛の松、お鼻井、はだか竜、藤治権現、若宮神社、程久保小僧など昔話や伝説が数多く伝わっている。『「郷土日野」指導事例』3集や5集では指導事例が紹介されている。なお、程久保小僧については市から資料が出版されている。

◎地域の伝統的な行事や文化財

中学年の副読本『わたしたちの東京都』では地域の伝統行事や文化財を調べ、そのよさを受け継いでいる人々の願いについて考える教材として浅草を取り上げている。しかし、浅草は遠いし実感が伴わないので、高幡不動の伝統行事や文化財、多くの人々が参拝に集まること、さらに地域の方や観光協会の活動などを取り入れて組み替える。

◎年中行事：ドンド焼き

教科書では「むかしの道具をさがそう」の発展学習として「年中行事に込められた願いを調べよう」というテーマで、七五三や節分が取り上げられている。市内ではふれあい橋の上流など15カ所で、ドンド焼きを実施しており、写真パネルなどの資料も郷土資料室にあるので、身近な行事としてドンド焼きを取り入れる。

◎6年社会「武士の世の中 落川遺跡と胎内文書」

6年の社会科「武士の世の中」の教科書の流れの中に、武士の始まりを伝える落川遺跡や源平合戦で活躍した平山季重、さらに文化財に指定されている胎内文書を残した山内経之などを組み込んだ指導案が「郷土日野」指導事例 第6集に紹介されている。

◎高幡不動堂の再建

6年社会科の大仏づくりでは、聖武天皇の大仏作りに行基が協力している。時代は異なるが、不動明王や二童子の修復には支配者の平助綱と妻の大中臣氏女、僧の儀海が協力している。不動明王が戦さのたびに汗をかく汗かき不動としても知られていることから、儀海らが「戦乱の世の中に平和を願って、不動堂の再建をした」として、その活動を紹介する。なお、儀海については『多摩のあゆみ』104号に掲載されている。

◎橋の名前

「潤徳橋」「後島橋」など橋の名前の由来を調べ、地図を利用することにより、昔の町の様子やその変化を理解することができ、中学年社会科などで活用できる。

◎愛宕山のクロマツ：松根油採取跡

現代に残る戦争の傷跡として松根油の採取跡や三沢の地下壕を取り上げ、潤徳小学校の児童が勤労奉仕として参加したことなど、戦争中の国民生活の理解を深める。

◎自由民権運動

6年の歴史学習の自由民権運動に関連して、森久保作蔵の活動を取り上げる。

(小坂克信)

・潤徳国民学校の思い出

元渋谷区立常磐松小学校長 會田 満

私が潤徳小学校へ通ったのは昭和18年4月から、昭和24年3月までである。この時期は、日本の歴史上大転換期であった。つまり昭和16年12月に始まった太平洋戦争が昭和20年8月に終わった時期である。入学した時は国民学校と呼ばれていて、卒業する時は小学校であった。しかし、ここでは高齢者の思い出話として、当時の歴史的社会的背景については直接触れないことにする。

○学校のように

私が入学した潤徳国民学校は、現在のJ A東京みなみ七生支店のある場所にあった。川崎街道沿いの一段高い場所に、木造の校舎があった。一段高い所にあっただけに、正門には数段の階段を登らなければならなかった。しかし、階段を登った右手には、桜の大木が植えられた築山があり、左手には応接用の玄関があり、子どもの目には「すごく、かっこいい」印象が残っている。

築山の南側には、終始横長のパイプから数箇所水が噴き出している池があった。私達は、そのパイプの水を飲んだり、足を洗ったりした。

校舎は、築山を頂点にJ型に二棟あり、東側は卒業式や学芸会の時は、会場になる打ち抜き教室と職員室があった。南側は、当時「高等科」と呼ばれていた生徒（今の中1・中2年生）が入る二階建てがあり、更にその先に、開校以来と思われる1年生が使用した古い校舎があった。

正門にはみかげ石の柱が建っていた、今の潤徳小の正門が多分当時の正門と思われる。

運動場は二つの校舎をすり抜けた先にあり、運動会するとき、トラックをつくると、ほぼ円形になってしまう狭さだった。したがって、運動会の時、父母の観覧席は校舎が開放・利用されていた。校庭を取り囲むように、南側から東側にかけて程久保川が流れていた。校庭と水の流れている間は、がけになっていた。子どもの目には、谷川を眺める感じで柵は特になかったが、危険なのであまり近寄らなかった。

後に、この川に橋がかけられ、南側の畑地（今の七生公会堂の所）が校庭に拡張された。今も残る「潤徳橋」が、当時の面影を残している。

校庭の東側の校舎の側には、国旗掲揚塔と二宮金次郎像があった。しかし金次郎像は戦争協力で供出され、台座しか残っていなかった。一段と高い所に残された台座の「報徳」の文字がなつかしく思い出される。現在の潤徳小には、コンクリートの金次郎像があるが、その台座は、多分、その当時のものであろう。

西側の校舎には、円形の大時計がついていたが、時刻を見た記憶が残っていない。校舎のガラスは、戦後、盗難よけに文字が書かれていたこともなつかしい。

○学校生活のように

当時と現在を比べると、一番の違いは、物資の有無である。つまり当時は戦争の影響で日本全体、物が極端に不足していた時代であった。

物を自由に売ったり買ったりできない時代で、配給制が実施されたりした。私は高幡に住んでいたが、高幡は、南平、三沢、百草など、七生の他の集落（部落と呼んでいた）と違い、農家は

ほとんどなく、住宅が密集した店屋（飲食店を含む）の多い所であった。しかし、戦争中は、ほとんどが店を開いていなかった。洋服などは、時に学級に1～2着割り当てがあり、希望者がくじ引きで手に入れることがあった。そんな訳だから、子ども達の日常の服装は、ほとんどの子は、兄や姉など上の子が着古した衣服を「お下がり」としてもらい着ていた。「継ぎ」があたった衣服をほとんどの子が着ていた。

履物は「下駄」で運動靴を使っている子はいなかった。学校の昇降口には、下駄箱が置かれていた。また上履きは、ワラぞうりで、持ち運びに使った袋は、「ぞうり袋」と呼んでいた。雨の日には、ゴム長靴はなく「高下駄」をはいた。雨降りの強い日は、はだしで通う子もめずらしくなかった。カサは紙と竹で作られた「番がさ」で大人でも「こうもりがさ」を使っていることは少なかった。

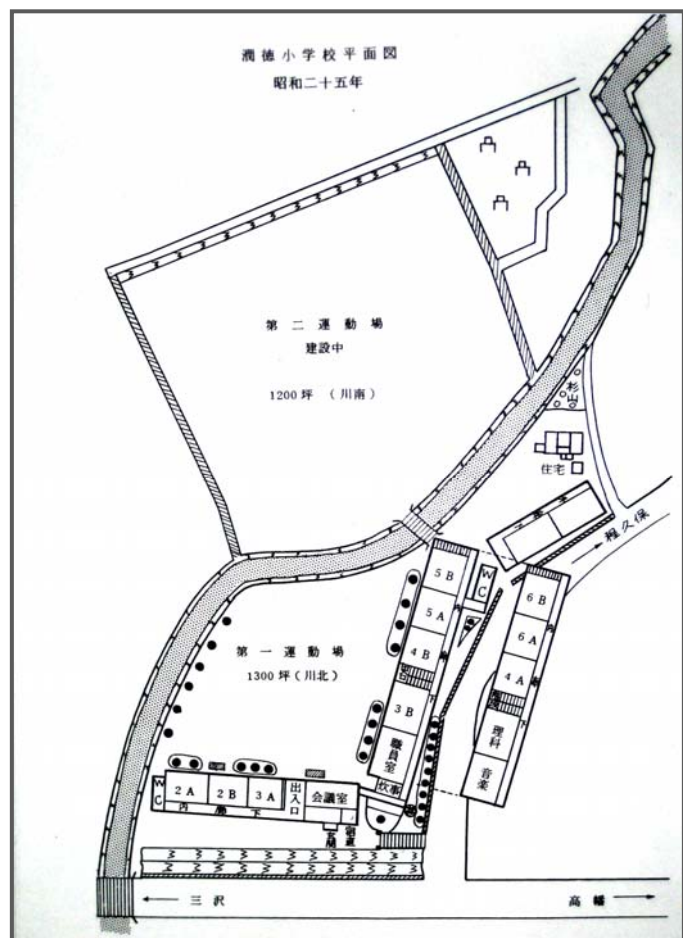
教科書は新しいものが手に入らず校庭で朝会のように整列し、上級生から下級生へ、使った教科書をゆずりわたす会があったりしたことを覚えている。戦後には、今の新聞紙のようなものが一枚配布され、それを折りたたんで教科書として使ったこともあった。学用品もあまり手に入らない。図工の時間使う「ねんど」は前の日、やま（多摩丘陵）から自分達でとって来て使った。習字も、練習には新聞紙を使って真っ黒になるまで使った。漢字を覚えるのに、校庭の土に書いては消して覚えたこともなつかしい。

食べ物も今のように豊富でなかった。戦後、弁当の時間になると、家へ食べに帰る子もいた。また、学級で食べる時、ほとんどの子が、弁当箱を人目からかくすようにして食べたことを思い出す。お米のご飯を持ってこれなかったり、おかずも貧弱で恥ずかしかったためである。

遊びは、当然今のように道具を使ったものはなく、集団で動きまわるものが多かった。学校の休み時間よくした遊びは、二組にわかれて競い合う「人とり」という鬼ごっこや「宝とり」というゲーム、「馬とび」というゲームなどである。冬は、日だまりで、「だせ だせ グウー」とジャンケン遊びをよくした。

このほかいろいろ思い出はあるが、以上、国民学校時代のことを物が不足していたことを中心に断片的に述べてきた。ただ、不思議なことに、当時、世の全体が物不足だったためか、子ども心には、あまり不便を感じなかった。物はなかったが、友だちと仲良く過ごした国民学校時代は、その舞台となった潤徳の木造校舎と共になつかしく思い出される。

（右の図は「潤徳百年史」昭和48年発行より）



・教材化の視点と課題設定

高幡地区フィールドワークで活用した都市計画東京地方委員会発行、昭和 15 年測図 1 万分の 1 地形図「高幡」を授業で活用する機会を得た。七生緑小学校第 3 学年総合的な学習の時間「七生むかし発見!」、潤徳小学校第 3 学年社会「高幡の今と昔」で実践できた。

導入の 1 時間であったが、児童は地形図を読み取り、多数の事柄に気付き、疑問を出し、課題を設定した。昭和前半までの古い地形図は、昔のことを発見させる教材として有効である。

七生緑小学校 第 3 学年 総合的な学習の時間「七生むかし発見」 (25 時間)

1. ねらい

- ① 地形図や航空写真を読み取り、自分たちが住み、生活している地域が過去 50 年ほど前から、大きく変化したことに気付き、その変化に興味・関心をもつことができる。
- ② 地形図や写真を読み取り、「七生むかし発見」学習の疑問や課題を持ち、今後の学習への追究意欲を高めることができる。

2. 展 開

- ① 導入・日野市の地形や土地利用について振り返る。資料→日野市全図、日野市の地形模型
・日野市全図を見て、今までに学んだこと、知っていることを発表する。

低地、台地、丘陵、川、工業地帯、田畑、果樹園、交通

日野の昔の地図を見て、七生の昔を発見しよう。

- ② 展開・昭和前半の地形図を読み取り、また、現在の地形図と比較し、自分達の町の大きな変化に気付く。資料→昭和前半期の七生緑小学区中心の地形図、現在の地形図

七生村合併前の日野町全図

- ・昭和前半期の地形図を見て、わかったこと、思ったこと、疑問について話し合う。

地名等 南多摩、七生村、日野町、七生村役場（郡、町、村）

百草、落川、高幡、別旅がある。三沢がない。

学校等 潤徳小学校、潤徳小学校分教場、真照寺

鉄道等 京王電気軌道、もぐさ駅、たかはた駅（昭和 12 年改称）

地図記号 低地→水田と桑畑、水車 丘陵→広葉樹林と針葉樹林

寺社等 百草園、八幡神社、観音堂

- ・七生緑小学校が地形図のどこにできたか考える。
- ・現在の地形図を見て七生緑小学校の位置を確認する。なぜ開校したのか考え、住んでいる町の変化を確認する。
- ・日野町全図を見て、七生緑小学校は、かつて日野町ではなかったことを知る。また、八王子市になっていた可能性もあったことを知る（八王子市立七生緑小学校？）
- ・「七生むかし発見年表」を見て、分かったことを話し合う。

- ③まとめ・地形図と年表から自分達の町の大きな変化に気付き、「七生むかし発見」学習への興味・関心と課題意識をもつ。 資料→七生むかし発見年表、日野町全図、新聞記事

- ・本時の学習を振り返り、分かったこと、もっと知りたいことをまとめる。

高幡不動、百草園、七生丘陵ハイキングコース、多摩動物園等

→ 七生村は京王線と共に発展していった。

水田、桑畑、森林の激減、住宅開発 → 人々の仕事や生活が大きく変わった。

- ・町の発展に伴い、七生緑小学校ができたことを知る。

潤徳小学校→日野第八小学校→三沢台小学校→七生緑小学校

(明治 6 年) (昭和 44 年) (昭和 55 年) (平成 20 年)

(小杉博司)

(2) 校長講話

① 校長講話の役割～郷土を題材とした講話～

子どもたちは日常的に地域の自然や社会事象に触れながら生活しています。そして、将来地域社会を支えていく存在となります。それゆえ、地域社会への理解を促進させ郷土への愛着を持たせることは極めて重要な課題の一つと言えます。しかし、子どもたちと地域社会の関係は近年希薄となりつつあり、地域行事への参加も減少する傾向にあります。こうした状況の中では、地域話題を意図的に紹介しないとそれぞれの地域に定着した貴重な伝統が、目の前にありながら見過ごされてしまうことになりかねません。本市には様々な地域があり、必ずしも一般化できるものではないと思いますが、それぞれの地域ならではの自然や歴史を感じさせるものが多くあります。

日野宿に代表される宿場町として、高幡山明王院金剛寺に代表される門前町として、また、真慈悲寺のような未だ明確になっていない遺跡など多くの歴史的な素材があります。また、「緑と清流のまち」に代表される豊かな自然と盛んな農業生産、本市域には極めて多くの自然や社会的な素材もあります。

私は、講話を考える時にその時期の気候や昔から伝わる行事を意図的に取り上げるようにしています。わが国では、長く米作りを中心とする農業生産が生活を支えてきたのであり、季節の移り変わりや天候に常に強い関心を寄せてきました。氷が張り霜柱が立つ冬から、梅が咲きメジロがやってくる早春へ、そして、さくらの春と農業が基幹産業でなくなった今でもこうした季節の変化に目を向けさせることは生活を豊かにし、暮らしに潤いを与えるものと考えています。

また、学校の周辺に目を向けると地域の暮らしや文化が見えてくることがあります。七草、立春、桃の節句、端午の節句、七夕等、昔の人たちの願いや考えていたことが今に通じていることも多くあります。こうしたものと地域に残る有形無形の文化財を取り上げ一つの講話としてまとめて伝えていくことが大切だと思います。

さらに、その時々学校の動き、めあてや課題をこの中に含めると子どもたちにとってもより身近で有意義な内容となると思います。人は、地域との関わりの中で生きていくものあり、その中にある歴史や文化を意図的に子どもたちに気づかせていくことが校長講話の重要な役割の一つです。

校長講話の内容は、講話をする時期の児童や学校、地域の実態を踏まえながらどのような題材で話をするかよく考え、郷土をテーマとする題材を積極的に導入していくことが大切だと思います。

(日野第一小学校 中島和夫)

② 八坂神社の秋祭り

[秋祭り]

まだ昼の時間は暑い日が続きますが、朝晩はだいぶ涼しくなりました。校庭でゲーム集会があった時、自然園に行ってみると5年生が6月に田植えをした「イネ」が大きく育ち、穂がついてお米ができていることに気づきました。また、今日9月12日は「十五夜」「中秋の名月」と言って、月にお供えものをし豊作を祈った日です。「中秋の名月」とは、秋の真ん中に出る月という意味で、夏から秋に季節が移り変わる時期なので、とりわけ月がきれい見える時期と考えられています。同時に、先程お米ができていたと話しましたが、「十五夜」は、お米ができたことに感謝するお祭りでもあり、昔はお芋をお供えしたそうです。今はそれがお団子に替わりこれと一緒に魔除けの「ススキ」を添えています。

さて、秋は色々な作物が育ち収穫される時期なので「十五夜」ばかりではなく学校の周りではお祭りが行われます。今度の土、日、月と行われる「八坂神社」のお祭りは皆さんもよく知っていますね。お神輿が出たりお囃子が聞かれたり皆さんにとっても楽しみなことではないでしょうか。学校の周りは昔、お米作りが盛んだったので、たくさんお米ができるようにお祭りを続けてきたのでしょうね。この八坂神社ですがもう600年以上前からあり、211年前に建てられた本殿にはきれいで細かな彫刻がしてあり、日野市の重要文化財になっています。一度見ておくと良いですね。また、皆さん聞いたことがあるかも知れませんが、近藤 勇や土方 歳三、井上源三郎等の新選組の人たちもこの神社にお参りしていたそうです。

秋には色々なものが収穫されるので、秋祭りはその豊作を祈って行われるとお話しましたが、学校も秋は収穫の時期といって良いと思います。それは、4月から勉強してきた成果を発表する時期だからです。その第一は「運動会」そして「展覧会」「陸上記録会」「ロードレース」「プレゼンテーション大会」いい結果が出せるように頑張ってください。そのためには、皆さん方一人一人の気持ち大切です。お祭りの神輿を見ると何となく力が湧いてくるように、皆さんは一人一人が力を出すことで本校は素晴らしい学校になっていきます。

八坂神社のお祭りは、昔から続けられてきた日野で一番大きなお祭りです。作物が少しでも多く取れ、豊かに暮らせるように願った昔の人の気持ちを皆さんは学校での生活で活かして欲しいと思います。まだ、暑い日はあってもこれからどんどん過ごしやすくなります。思いきり体を動かし、勉強をしっかりと進めて立派な小学生になってください。

(日野第一小学校 中島和夫)

③ 日野にも爆弾が落ちた

東京大空襲

飛行機から爆弾や機関銃などで地上を攻撃することを「空襲」と言います。今から67年前の1945年3月10日の午前0時過ぎに、東京の東側（現在の台東区、墨田区、江東区など）にアメリカ軍の飛行機による空襲がありました。2時間半にわたる爆撃で、辺り一帯は火の海となり、10万人以上の市民が亡くなったり行方不明になったりしました。この空襲は、「東京大空襲」と呼ばれるようになりました。日野からも東の方の空が真っ赤になっているのが見えたそうです。

日野市にも空襲が

この日野にも、空襲がありました。日野には、飛行機の部品（計器類）などを作っていた東洋兵器工業（現セイコーエプソン）や、戦車などを作っていた日野重工業（現日野自動車工業）があり、攻撃の目標にされたのです。空襲を経験した方の話では、夜に飛行機が飛んできて照明弾を落とし、あたりが昼間のように明るくなったそうです。空襲の始まりです。どの家でも庭や畑に「防空壕」という穴が掘ってありました。空襲警報のサイレンで、防空壕に逃げ込みました。その後で爆弾がたくさん落ちてきて、ものすごい音と地響きで生きた心地がしなかったそうです。豊田地区と川辺堀之内地区の境あたりに爆弾が何発も落ち、地面に大きな穴がたくさん開きました。その穴を埋めるために、地域の人に混ざって小学生も一緒に作業をしたということです。

河井 美代子先生

この頃、二小（当時は日野国民学校豊田分教場）に河井 美代子 先生が勤められていました。河井先生は現在満100歳で、とてもお元気です。河井先生のお話では、この豊田の地域からも多くの若者が兵として召集され、戦場に行ったそうです。皆さんの中には、豊田駅の南口近くにある「豊田地蔵尊」というお地蔵様を知っている人も多いと思います。戦場で命を落とされた地域の方々のお名前が石碑に刻まれています。河井先生の教え子も、4人の方が戦争で亡くなっていて、「お地蔵様の前を通るたびに、手を合わさずにはいられないのです。」と、悲しそうに話されていました。



戦没者慰霊豊田地蔵尊

1945年8月15日に、戦争の終わりを告げる昭和天皇の言葉がラジオで放送されました。河井先生はちょうど日直の仕事で学校にいて、その放送を聞きました。そのとき、「日本が負けてしまった。」という気持ちと、「これで怖い思いをすることがなくなった。」という二つの思いが湧いてきたそうです。

童謡たきび

豊田駅で、発車の合図に使われている「たきび」という曲があります。作詞者は、日野に住んでいた詩人 巽 聖歌です。「たきび」は、太平洋戦争が始まった1941年12月に、初めてNHKラジオで放送されました。しかし、すぐに打ち切りになってしまい、その後戦争が終わるまで放送されることはありませんでした。「たき火は攻撃目標になる。」「落ち葉も貴重な資源、風呂ぐらいは焚ける。」という声が、軍隊の関係者から上がったためのようです。戦争で、歌も自由に歌えなくなることがあるのですね。

二度と戦争を起こさない

戦争は、多くの尊い命を奪い去り、人々の生活を辛く暗いものにしてしまいます。太平洋戦争で命を落とした日本人の数は、（厚生労働省によると）軍人がおよそ230万人、民間人がおよそ80万人です。みんなを不幸してしまう戦争は、自然による災害ではなく、人間が引き起こすものです。人間が引き起こすのですから、戦争を起こさないようにすることも人間にはできるはずです。私たちは、戦争で命を落とされた方々のご冥福をお祈りするとともに、二度と戦争を起こさないようにみんなで知恵を出し合い、平和な社会を築く努力をしなければなりません。

（日野第二小学校 中村康成）

引用・参考文献 ・「開校100年のあゆみ」 日野第二小学校百周年記念事業協賛会 昭和49年
・「日野の歴史と民俗135」「(同)138」 日野市郷土資料館
・「日野市史 通史編四」 日野市史編さん委員会 平成10年

④ 高幡の歴史「若宮神社のいわれ」

今日の話は、校長先生の作り話の昔話。それでは始まり、始まり。

風のないある日、若宮神社の前を通ると、神社の神様の鈴がじゃらんじゃらんと鳴っていました。風もないのにどうしたことだろうと思ってお賽銭箱のところまで行くと、箱の横に白くて長いひげのおじいさんが座っているではありませんか。あれ、さっきは見えなかったけれど変だなあと思っておじいさんにお辞儀をしたのです。すると不思議なおじいさんは「あんたはあその学校の校長さんかい。」と言いました。なぜ知っているのだろうと思いましたが驚いた顔を隠して「はいそうです。」答えました。「校長さんならこの神社がどうしてできたか知っているだろうね。」と言いますから、「ごめんなさい。私は知りません。」と言いますと、「あきれたことだ。それでは私が教えてしんぜよう。」とたいそうえらそうに言うのです。そのおじいさんお話はこうでした。

高幡不動には不動明王があるが、大きな不動明王だ。大きな目をして立っておる。その脇に子どもの仏が2人いるのを知っているか。この2人の子どもの像は仏様の仮の姿といわれておる。じゃがな、昔々はこの二つの像はなかったのじゃ。

ずっと昔、ある年の秋のことだ。柿のみが赤くなって実っておった。高幡不動の金剛寺に旅の僧がたちよったと。寺のお坊さんはその旅の僧といろいろな話をした。旅の僧がいうには、「お不動さんの脇に本当はいなければならぬ子どもの像がないのでしょうか、立派な不動明王なのにおいしいことですねえ。といわれじゃ。お坊さんは旅の僧といろいろな話をしているうちにこのお坊さんがたいそうえらいお坊さんだと気が付いたのだそうじゃ。

お坊さんは旅の僧が仏の像を彫ることぐらいできるのではないかと思い、子どもの像を作ってはくだらないかとお願いすると、しばらく考えた旅の僧は「どのようなものができるかわからないがそんなに言うならやってみましょう。」と引き受けてくれたそう。

やがて寺の1つの部屋に入った旅の僧は、「けして覗いてはなりませんぞ。」と言って襖をぴたりと閉めて3日間籠ったそう。部屋の中からはノミの音だけが響いていたそう。やがて3日と3晩たち、ふらふらと出てきた旅の僧が見せた子どもの像はそれは立派なものでその見事さは言葉でいえないほどだったと。寺のお坊さんはこの3日間に毎晩夢を見たそう。大菩薩様が一心不乱に彫刻を掘っている夢であったと。不思議な夢だと思ってしばらく旅の僧をおもてなししていると、「そろそろまた旅に出ます。」とお寺を出て歩き始めたので村の外れまで出て見送ったんじゃが、スーと煙が昇って旅の僧の姿が消えてしまったそう。やはり旅の僧は人間ではない大菩薩さまだったとみんなで言い合って消えたところに神社を建てたのだと。それがこの若宮神社じゃ。

「そうなんですか少しも知りませんでした。ところであなた様はいったいどこのどなたですか。」と尋ねると老人はにっこり笑ったかと思うと消えてしまいました。私は不思議で夢かなあとほっぺをつねった。痛！夢ではない。

これは昔話の本当の話、とっぴんぱらりん。

※定かに分かりませんが郷土資料館から頂いた郷土の昔話から題材にして多少創作したものです。校長講話で21年10月に話しました。

(潤徳小学校 宮崎芳子)

⑤ 平山おかぼと林丈太郎

おはようございます。

今朝はみんなの住んでいるこの町「平山」を大切に思い、「平山」のためにつくした人の話をします。

（おかぼの稲わらを出して）これはなんだか分かりますか。………そうです。稲の束です。この穂から取れるのが、みんなが毎日食べているお米です。でもこのお米は少しみんなが食べているお米とは違うんです。どこが違うのだと思いますか？ ……この米の育った場所が違うのです。

ふつうお米を育てるのは、水のいっぱい入った田んぼですね。春になるとたくさんの水を田んぼに入れて稲を育てます。日野では6月ごろ田植えをして10月頃に稲を刈り取ります。でも、校長先生の持っているこのお米は、水のいっぱい入っている田んぼで育ったのではなくて、水の無い畑で育ったお米です。こういうお米を「おかぼ」といいます。平山小学校では毎年、4年生のみなさんが、このおかぼを栽培していますね。

水の無い畑で育てるこのおかぼにはたくさんの種類がありますが、このおかぼには「平山おかぼ」という名前が付けられています。平山小学校の「平山」です。なぜ、このような名前になったのか不思議に思って4年生のみなさんと一緒に調べてみました。

このおかぼは、今からちょうど100年前（明治44年）に発見されました。発見した人は林丈太郎さんという人です。この平山に住んでいた農家の人です。

この林丈太郎さんは今から136年前、明治8（1875）年、この平山、むかしは七生村平山に生まれました。みなさんの大先輩ですね。

林丈太郎さんはあるとき畑に今までずっと蒔いてきたおかぼの種をまきました。秋になって収穫をするとき穂先が紫色した稲を一株だけ見つけたそうです。その稲を大切に取っておいて次の年に蒔きました。すると、その年は去年よりもっと紫色の濃いおかぼができました。そのおかぼは今まで丈太郎さんが育ててきたおかぼより、立派な（不熟粒のない、おいしい）お米でした。また、雨が少なくてもよく育ち、たくさんとれることも分かりました。このおかぼのことは、近所の農家の人たちにも知れました。初め丈太郎さんが見つけたおかぼなので「丈太オカボ」とよばれていましたが、その後、「平山」と名前が付けられました。そして、このおかぼは日本全国（特に中国地方の砂地や乾燥地帯）に広まりました。

なぜ、林丈太郎さんはこんな発見ができたのでしょうか。それは、平山に住む人や農業をする人が豊かに幸せになってほしいといつも願っていたからです。その思いが平山おかぼの発見につながったのです。「みんなのために」の心ですね。

林丈太郎さんは昭和2（1927）年に52才で亡くなってしまいましたが、丈太郎さんが残した「平山おかぼ」はこうして残っています。そして、このおかぼを育てているのが平山小学校のみなさんなのです。

丈太郎さんのお墓は、今、平山3丁目の「宗印寺」にあります。お墓の石には「このお墓は小さいけれど、丈太郎さんのやった仕事はとても大きい」と彫ってあります。校長先生もお花の代わりに、この「平山おかぼ」の稲わらを持って林丈太郎さんのお墓をお参りしてこようと思っています。

今朝はみんなの住んでいるこの町「平山」を大切に思い、「平山」のためにつくした人の話をしました。

（平山小学校 五十嵐俊子）

⑥ 開校記念日の講話

6月1日は滝合小学校の誕生日である開校記念日です。人でいうと41歳になりました。今年は40周年の記念の年ですね。そこで、校長先生は滝合小学校の歴史を調べてみましたのでお話ししたいと思います。

滝合小学校は昭和46年に平山小学校から分かれて日野市で11番目の学校として開校しました。今は330人の子どもと一緒に学んでいますが、開校の時は728人の子どもがいました。一番多い時は1075人・27学級もあったのです。今のみんなの3倍の子どもたちがこの学校で学んでいたのです。開校したときは学校のまわりは家もほとんど建っていないで、田んぼや畑に囲まれていました。浅川の土手には滝合小の校章にもなっている月見草が夏の夕方にはたくさん咲いていたそうです。今よりももっと自然に恵まれた学校だったのです。

ところで、この学校の住所は西平山ですね。滝合という住所はどこにもないのになぜ滝合小学校になったのでしょうか。

10年前の30周年の記念に作った本にこんなことが書いてありました。「滝合」という名前の由来は、昔は浅川の向こうの(みんなの後ろにある)多摩丘陵には家が一軒もなく、昼も暗くなるほどの大木が茂っていて、とても人が入れない山だったそうです。(今はいっぱい家が建っていて考えられませんか。)山の中にはあちこちに清水が湧いていて、山肌を削り流れ出していたそうです。その清水は山の中で8mも10mもある滝となって浅川に流れ込んでいました。その滝は一つではなくたくさんあったそうです。このように滝が合わさるところという意味でこの辺りを「滝合」と呼んでいたそうです。

このように学校の名前には深い意味と昔の人の思いが詰まっているのです。こんなことも考えながら、今年の40周年をみんなでお祝いしましょう。

(滝合小学校 岡部君夫)

⑦ 旭が丘の地名に新しい希望を込めて

みなさんが住んでいるここ旭が丘は、日野の中心である日野駅や高幡不動駅にくらべて、一段高い場所にあり、日野台地と呼ばれています。

今から、400年くらい前の江戸時代のはじめには、甲州街道が一本通っているだけでした。あたりは、昼でもうす暗い雑木林と草はらがどこまでも続いていて、盗賊が出たり、殺人事件も発生することがありました。それは、台地のために水を手に入れることが難しく、ほとんど人が住んでいなかったからです。

人々は、日野台地の下にあたり、水の得やすい、浅川ぞいや日野駅付近 高幡不動駅付近には16もの村々があり住んでいました。

その当時は、高いところにある、はらっぱという意味から、高倉原と呼ばれていました。

いまでも、高倉小学校や高倉南公園など地名として残っています。

その村の人たちにとっては、雑木林や草はらは生活にとって大切な場所でした。雑木林の木を、ご飯を炊くたきぎにしたり、落ち葉を肥料にしたり、草を馬のえさにしていました。

300年前には、江戸幕府より、この地の開発を命じりましたが、たきぎや落ち葉、草が手に入らなくなるので、開発はやめてくれと反対したけれども、聞き入れられませんでした。

畑として開発された帝人研究所のあたりは、住んでいる村から遠いという意味で沖(オキ)新田と呼ばれていました。

新しく開発された土地は多くは畑として使われ、かいこを育てるための桑畑でした。高幡や南平から、毎日、桑の葉をとりに来るのは大変だったでしょうね。

その後は、高倉大根 やスイカなどの新鮮な野菜をつくって東京青果市場に出荷していました。

昭和33年に、日野町と七生村が合併して新しい、日野町ができましたが、同じ条件で合併するには、このあたりに大きな工場をつくることしかないと考え、ファナック・東芝・帝人・トッパン印刷などを呼びました。

工場用地として整備し、その東側を住宅地として開発が進み、飲み水を送り届けるために、旭が丘浄水場ができました。緑を残し、住む人々の憩いの場所として、「中央公園」や児童公園もできました。

1973年まで、10年間にわたって整備が進められて、この地を「旭が丘」と名付けました。

それまでは、畑を持っている人が住んでいた、日野・豊田・平山・南平・高幡・西長沼などという地名が入り組んでいて、郵便配達の人が大変困ったようです。

この整備にともない、新しい希望を込めて、住んでいる人々が「旭が丘」と一つにまとめたて名付けたのです。

さて、みなさんの「旭が丘小学校」もこのころ誕生しました。

校章の中心には学校を示す「旭」の文字が、所在地「旭が丘」を四方の昇る朝日で表しています。その間には、学校の雑木林に40本近くあった、松を配しています。

日野市の18番目の小学校なので、仮の名は「日野市立第18小学校」でした。ですから松とのぼる朝日で18小とも読み取れるようにしたそうです。

新しい町ができた時の人々の喜びと願いを忘れずに、みなさんも希望をもって、未来に向かって進んでいきましょう。

(旭が丘小学校 石田恒久)

⑧ ふるさとから学ぶ

まず、暦の話をします。今週の12月22日は、冬至になります。冬至は、一年のうちで夜の時間が一番長く、昼の時間が一番短い日です。この日にゆずのお風呂に入ると、一年中風邪を引かないといわれています。また、この日に煮たカボチャを食べると一年中健康でいられるとも言われます。

今日は、「ふるさとから学ぶ」というお話をします。この本は、3年前に開校30周年を記念して作った副読本です。題名は、「わたしたちのふるさと東光寺」と言います。この本には、東光寺の昔のことがいっぱい書いてあります。どこのクラスにも置いてありますから、雨の日などぜひ読んでみると、東光寺のことがよく分かり、とても勉強になります。

今日は、この本に載っている「栗を持って安産祈願」というお話をします。

日野市栄町の成就院に薬師堂があります。薬師堂の中には、本尊の薬師如来と十二神将が祭られています。特にこの薬師様は、安産のお守りとしてご利益があるということで、安産薬師と言われていました。

昔、名主の家に子供が生まれそうになった時、夢枕に薬師如来が立ち、「枝の付いた栗を供えれば、安産になる。」とのお告げがありました。そこで、その通りにすると、ほどなく元気な子供が生まれました。それ以来、成就院のお薬師様は、「安産薬師」として、人々の厚い信頼を受けるようになりました。また、安産祈願やそのお礼には、枝に栗を付けた（枝栗）を納めるという習わしになったといわれています。

毎年、10月10日が、この薬師の大祭です。さらにこの薬師様は、目や耳の病気を治してくださいとも言われています。その場合には、穴の開いた自然石をお供えするそうです。

東光寺小学校の児童の皆さんは、ぜひ、この本から、ふるさとから学んで、東光寺のことをもっと知って、自分の住んでいる東光寺のことを好きになってください。今日の校長先生のお話を終わります。

<工夫していること>

- ・全校朝会で話すタイトル「ふるさとから学ぶ」については、全校の児童に話を受け止めてもらうために画用紙を縦に2枚張り合わせたものに墨で書いています。また、「冬至」などの大切な季節の言葉も画用紙に書いて、児童に見せるようにしています。

- ・必ず、全校朝会で話をするとき、児童に季節のことを知ってもらうために暦の話を意図的に入れるようにしています。

（東光寺小学校 垣内成剛）

⑨ 郷土を愛する心—日野に生きる私たち—

移動教室や修学旅行から日野に帰ったとき、クラスの仲間と一緒にバスの中にずっといたいという名残惜しさとあわせて、「日野に帰ってきた」という懐かしさを感じたことがみなさんにはありませんか。

日野には多摩川と浅川が流れ、町なかには用水の清流が流れています。用水の流れの中には小魚の群れや鯉がゆったりと泳ぐ姿を見ることができます。また、日野のあちこちから富士山を望むこともできます。

私たちの心の中には、自分が生まれ育ち、生活している地域に対して大切に思う気持ちや懐かしさを感じる気持ちが育ってきます。また、私たちの心は山や川や森、街並み、神社やお寺、学校や公園など見馴れている光景に愛着を感じ、近所に住む人々やその地域に暮らす人々が話す言葉遣いに心の安らぎをおぼえ、心が豊かになっていきます。

保護者の方や日野の人と話していると、「わたし、日野の出身なんですよ」という言葉をよく聞きます。その言葉には自分が生まれ育った土地への愛情が感じられます。また、「日野は住みやすい町ですね」という言葉もよく耳にします。

「第二のふるさと」という言葉がありますが、日野に引っ越して何年も住んでいるうちに、知り合いや友達ができて、日野がだんだんふるさとのように思えてくる人も増えてくるのではないかと思います。

人が生活しているその土地には、より住みやすく、より豊かな村や町にして子孫に引き継いでいこうとする数百年に及ぶ先祖代々の人々の営々とした知恵や工夫、汗や働き、希望や期待が込められています。

その一つの例として日野宿発見隊の方からうかがった話ですが、総延長170kmにも及ぶ日野用水は江戸時代以前の400年以上も前から日野の田畑を潤し続け、日野の人々に恩恵をもたらしてきました。その400年以上の歴史の中には地震もあつただろうし洪水もあつただろうと思います。しかし、先祖の人々はそのつど復旧に力を尽くし今につないできました。ウナギが洪水から守ってくれたという伝説から四谷地区ではウナギを食べないという話がありますが、この話からも何とか田畑を洪水から守り、子孫に残そうという先祖の人たちの労苦が伝わってきます。このように、その土地に伝わる言い伝えや土地の名前の由来を知ることその土地への愛着につながるかもしれませんね。

私たち人間はだれでも一人だけでは生きていくことはできません。人間は社会の一員として生まれ、人々の恩恵の中で成長します。そしてまたその土地の恩恵の中で生活をしていきます。

また、私たちは今この時間だけというような、単独の現実の中だけで生きているわけではなく、自然の恵み、その土地での長い歴史の流れ、文化や伝統、先人の汗や働きなどの営みの積み重ねの上に生きているのです。そのことに思いを致すとき自然に私たちの心の中に感謝の気持ちが湧き上がってくるのではないかと考えています。そして、この感謝の念を基に私たちもこの郷土をさらによくして次の世代に託さなければなりません。

昨年3月11日、東北地方を大きな地震と津波が襲い多くの人々が尊い命を失い家屋を流されました。さらに福島では津波で原子力発電所が破壊されて放射能が漏れました。これらの地域の方々は無念にも郷土を離れることを余儀なくされました。しかし、いつかきっと愛する郷土に戻り、この地域の人の粘り強さで見事に郷土を再建することを願っています。

(日野第一中学校 吉村正久)

Ⅲ 研究のまとめ ～成果と課題～

研究主題「郷土意識を育む指導の在り方～郷土の歴史、自然、文化、産業、人の教材化を通して～」のもと、1年間、研究と実践に努めてきた。大きな成果は、郷土資料の教材化を通して、指導者である教師が、郷土「日野」の特色やよさを知り、この教材で授業がしたい、子どもたちに郷土の特色やよさを伝えたいと意識を高めたことである。教師の意識の高まりと授業実践意欲が、郷土に対する誇りと愛着をもった「ひのっ子」の育成につながると考える。

10月の中間報告会、2月の研究発表会と2回の研究発表の機会があったが、教育センター運営審議委員・教育委員会・校長会の各先生方から、「貴重な郷土教材を多数発掘していただき感謝」「具体的な実践例を見て、日野のよさがよく分かった」「日本の教師や授業のレベルの高さを感じた」「ふるさとの大切さを改めて感じた」「授業に学ぶ喜びと出会いの感動があった」「成果の活用・推進、普及・啓発が大切」「幼稚園・中学校にも取り入れたい」と高い評価と課題をいただいた。発表会や運営審議会での討議、郷土教育推進研究委員会での協議をまとめてみると、郷土教育のキーワードは、まさに「身近」「具体」「地道」「継続」となる。過去7年間の成果は、身近で具体的な教材を発掘し、授業実践を地道に継続してきた賜と考える。郷土を生かすことは、子どもにとってよく分かる楽しい授業の創造となる。

子どもと共に若手委員の授業力が大きく伸びた。保護者・地域・関係機関と共に授業を創造し、自信に満ち溢れた郷土教育リーダーへと成長している。2月の研究発表後の感想に「苦しさと楽しさの両面を味わい実践できたことに満足している」「学び続ける大切さ、楽しさが分かった」「楽しく学ぶ子どもの姿が、苦しいときの励みとなった」「図書館・博物館・学校が交流できよかった」「自分で考え取り組めたことが楽しかった」等の言葉があった。委員一人ひとりが、1年間の実践をやり遂げた満足感をもつことができた。

また、本市校長会が郷土教育の重要性を理解し、「郷土教育は校長のリーダーシップから」を合言葉に、児童朝会等の校長講話で積極的に郷土教育に関する事柄を取り上げていただいた。『平成23年度「郷土日野」指導事例 第7集』には、9本の校長講話を掲載することができた。

私たちの使命は、この成果を本市の小・中学校へ普及・啓発させることである。今年度はこの普及・啓発を大きな目標として、3つの重点課題を設定し、教材開発・授業実践に励んできた。

1 成果

(1) 学習指導法の研究、指導者の育成

- ① 各委員が実践した事例7件、新たに開発した郷土教材3件を「郷土日野」指導事例 第7集に掲載することができた。
- ② 年間3回発行の「教育センターだより」に、今年度発掘・教材化できた事例を掲載することができた。
- ③ 夏期休業中に高幡地区のフィールドワークを実施し、その教材化の演習と実践事例発表、博物館・図書館の活用方法等の内容で全日研修会をもつことができた。
- ④ 中間報告会、研究発表会で、1年間取り組んだ授業実践事例・郷土教材開発事例を発表することができた。

(2) 郷土資料館・図書館等関係機関との連携

- ① 市内公立博物館・図書館から多種・多様な指導資料や情報の提供を受け、また、専門的な見地からの指導・助言があり、効果的・効率的に郷土教材を活用した協働授業が実践できた。
- ② 博物館・図書館との連携が深まる中、多くの学校が見学・調査・体験等の学習に博物館・図書館を活用するようになった。

(3) 郷土教材の電子データ化

- ① 「郷土日野」指導事例集、さらに、指導事例集の写真図版を日野市立教育センターのホームページに掲載することができた。
- ② 郷土教育に電子データ化された教材や ICT 機器を活用した授業実践を行うことができた。
- ③ 過去のプレゼンテーションデータを全委員が共有し、活用することができた。

(4) その他

- ① 本市小中学校校長会の理解と協力のもと「郷土教育は校長のリーダーシップから」を合言葉に児童・生徒朝会で郷土教育に関する「校長講話」を多数の学校で実施することができた。
- ② 郷土教育推進研究委員会の若手教員が1年間の継続研究を通して、日野のよさ・特色に気づき、郷土の教材化・授業実践の楽しさを体験した。また、子ども、保護者、地域と共に授業を創造し、授業力を向上させた。
- ③ 本委員会に学校現場から、フィールドワーク、授業、若手教員指導の要請が増え、学校現場の期待に応えている。

2 課題

- (1) 研究推進・授業実践の成果を継承・発展・定着させることである。そのため、小中学校校長会の理解と協力を得て、学校での普及・啓発活動をさらに推進することが重要である。
- (2) 郷土教育推進リーダーの養成が必要である。若手教員が育ちつつあるが、教員間の郷土教育への関心度の差が大きい。「日野をふるさと思ひ、日野に誇りと愛着をもった教員」「日野の教育を背負って立つ気概をもった教員」の育成が必要である。
- (3) 日野市教育委員会と連携し、日野の特色やよさが理解できるフィールドワークや教材化・授業づくりの研修会を充実させることが必要である。
- (4) 博物館、図書館、公民館等生涯学習関係機関との連携・協力関係を深め、学校との人材の交流等の協働関係を深めたい。
- (5) 本委員会所属委員間で相互に授業を見合い、児童・生徒の実態、郷土教材の有効性を検証し、よりよい教材化を図りたい。

(小杉博司)

郷土教育推進研究協力者 (敬称 略)

- ・清水 良夫 農業指導者 野菜栽培指導講師
- ・杉浦 銀治 国際炭焼協会会長 炭焼指導講師
- ・森久保 憲治 資料・情報提供
- ・北村 澄江 郷土資料館 資料・情報提供
- ・矢口 祥有里 郷土資料館 資料・情報提供
- ・渡辺 生子 日野図書館 資料・情報提供
- ・石嶋 日出男 日野図書館 資料・情報提供
- ・河野 和昌 教育センター ICT活用
- ・菊川 民雄 教育センター ICT活用

郷土教育推進研究協力団体

- ・交通新聞社
- ・高幡山金剛寺
- ・日野宿発見隊
- ・日野市公立小学校校長会
- ・洋菓子 FUJIU
- ・JA 東京みなみ七生支店
- ・日野市中央公民館高幡台分室
- ・日野市公立中学校校長会

平成23年度 郷土教育推進研究委員会委員

No.	役 職	所 属	職	氏 名
1	委員長	日野第一小学校	校 長	中 島 和 夫
2	副委員長	日野第二小学校	副校長	秋 田 克 己
3	委 員	元渋谷区立常磐松小学校	元校長・学識経験者	會 田 満
4	委 員	元日野市立百草台小学校	元校長・学識経験者	吉 野 美智子
5	委 員	日野第一小学校	教 諭	馬 鳥 誠
6	委 員	日野第二小学校	教 諭	瀬 川 敦
7	委 員	日野第五小学校	教 諭	亀 田 貴 彦
8	委 員	潤徳小学校	教 諭	西 沢 庸
9	委 員	旭が丘小学校	教 諭	荒 木 聖 男
10	委 員	東光寺小学校	教 諭	永 江 悟 大
11	委 員	仲田小学校	教 諭	森 田 誠 司
12	委 員	七生緑小学校	非常勤教員	小 坂 克 信
13	委 員	新選組のふるさと歴史館	副主任・学芸員	金 野 啓 史
14	委 員	郷土資料館	学芸員	白 川 未 来
15	委 員	中央図書館	司 書	星 ま ゆ み
16	事務局	市教委学校課	指導主事	長 崎 将 幸
17	事務局	日野市立教育センター	所 員	小 杉 博 司

郷土教育推進研究報告書

平成 23 年度「郷土日野」指導事例 第 7 集

発行日 平成 24 年 3 月 31 日
発 行 日野市立教育センター
郷土教育推進研究委員会
〒191-0042 日野市程久保 550
TEL 042-592-0505
FAX 042-592-1148
印 刷 システム印刷株式会社